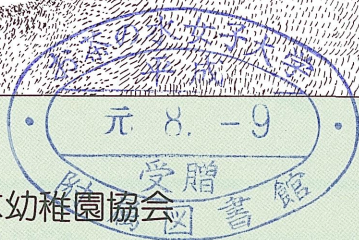


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1989 9



第88巻 第9号 日本幼稚園協会

# これからの「子育て」



全日私幼主催の「21世紀をめざす子育て国際会議」の子育て小論文コンクール受賞作品集。

21世紀の子育てに関する小論文で母親、幼児教育関係者、教員、学者、ジャーナリストなどいろいろな立場からの子育てに関する意見をまとめています。日頃子育てに関して悩みをもつ母親や保育者などはもちろん幅広い子どもに関する勉強をしたい方々には大変参考になる子育て論、一家に一冊、一園に一冊をおいておきたい書です。

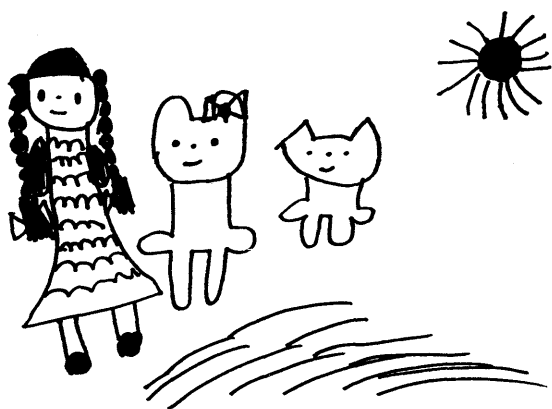
21世紀をめざす「子育て」について、  
いろいろな立場からの提案を  
まとめた書!

全日本私立幼稚園連合会編

B6変型判・264頁

定価1,200円(本体1,165円)

# 幼見の教育



第88卷 第9号

# 幼児の教育 目次

## — 第八十八卷 第九号 —

© 1989  
日本幼稚園協会

### △ 卷頭言 △

early-childhood education のいとなみ……………高橋さやか…(4)

しゃぼん玉をめぐる対話……………津守 真…(6)

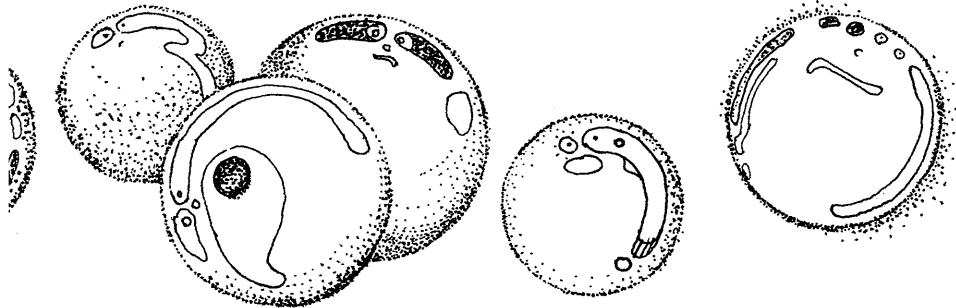
保育の原点を考える……………柴崎 正行…(10)

子どもは自力で乗り越えるもの……………田中三保子…(18)

### 本の紹介

『保育の一日とその周辺』……………友定 啓子…(22)

昆虫——小さな世界……………高家 博成…(24)



子どもの絵あれこれ(下).....川崎 千束...(32)

昔話の一考察

女性の心の内的成長について(下).....小野 瑞江...(39)

イメージ画にみる母子関係 その3

おとす母とうたれる私.....やまだようこ...(48)

若いお母さんたちへ

劇「おしゃべりなたまごやき」と四度目の「ありんこ市」...友定 啓子...(56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

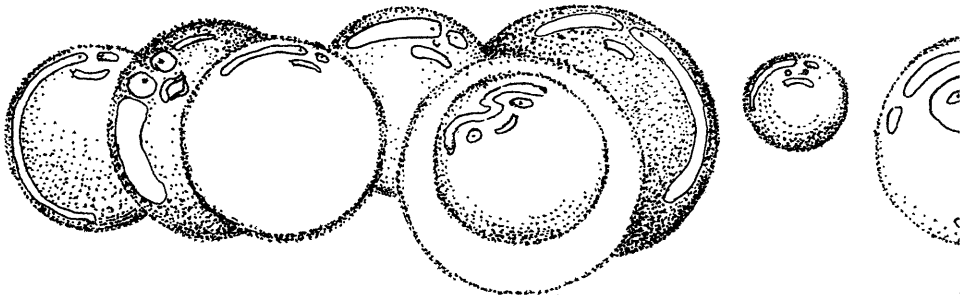
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子/村山 英子

上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



## early-childhood education のいとなみ

### —— 人格形成期の教育 ——

高橋 さやか

いまでも、またしても、と言われそうな気がしますが。書く方もそう思わないでもありません。けれども、今日、できるだけ素朴にできるだけ根柢からたしかに、できるだけ単純にできるだけ確実に充実した保育を、とどうしてもそう考えてしまいます。

早い時期の子どもの教育は、おとなの合目的主義ではいとなみになり得ないのです。いとなみになり立たないのに、目的達成はあり得るはずがありません。教育課程、保育内容、領域・ねらい・

内容、とくりかえし熱心に論じられる中で、教育対象が「子ども」』『発育期の人間』に外ならないこと、生まれ、生きはじめた以上、一人ひとり「生活者」であること、人間の規格規準としての「人格」はその形成の因子は遺伝子にすでにくみ込まれたものであるとはいえ、受精卵から出発して胎児期を経、そして誕生してからの「生活において」形成しつづけられるものであること、早い時期の子どもの教育は、とりもなおさず生活教育であり人格形成の（その意味での発達課題達成

の)教育である、それ以外のものではないと考えるのです。であれば、保育・幼児教育のいとなみは、生活学習(習慣形成)、遊び・しごと活動——生活体験・経験のすべて、にかかり、いつでもどこで・だれ(とだれ——グループ)が、何を(何で・如何に)為したか、一人ひとりの子どもそして彼の(属する)保育集団自身の生活活動そのものに外ならない——従って、保育内容の領域は、すべて、生活活動の、その(領域名の)側面をいうことになるはずで。

新教育要領の領域を、生活学習(習慣形成)の、健康にかかわる・人間関係にかかわる・環境にかかわる・言葉にかかわる・表現にかかわる側面、遊び・しごと活動の、健康・人間関係・環境・言葉・表現それぞれにかかわる側面、として考えるなら、(筆者にとっては少々無理するところなしとは言い兼ねるが)まあそれなりに何とか納

まらなくはないでしょう。

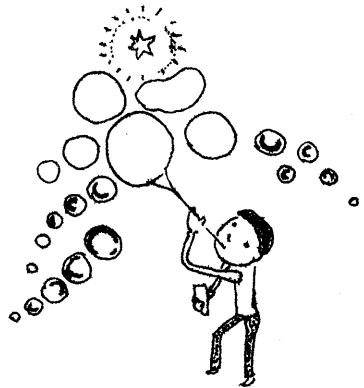
結局私たちは、子どもが、生活者として、彼自身にとって順当な発育を遂げ、おとなとして一人前の生活者になるように——、人格をトータルなものとして見守る態度をもって「発育する人間」にかかわり「人間の発育」に与らなければならぬのです。

発育する人間とその発育に与る人間との生活が、常なる現在、生活過程の一こま——こまが、共有され共同活動によって充足されるものであること。……のために、……になるように、とあまりに限定的に合目的になることから、何とか脱却して、時間と空間と、その中で生きて育つこと、を大切にしたいと痛切に思います。

(西南女学院)

# しゃぼん玉をめぐる対話

津守 真



ある日の保育のできごとをこまごまと述べることは読者には、多分面白くないことを承知しつつ、その日のことをまず記すことにしよう。

H子とA子とM先生がしゃぼん玉をしていた。H子は自分がしゃぼん玉を吹く傍で、他の子がしゃぼん玉をやるのはいやなのだ。M先生は言った。H子はA子のしゃぼん玉をとり上げようとしていたが、遂に、しゃぼん玉の液のはいった容器をひっくり返し、液を全部こぼして立ち去った。

そこにS夫がきてしゃぼん玉をやりはじめた。小さいのや大きいのが部屋から庭へと次々ととんでいった。彼は両手をふってとびながら、しゃぼん玉がとんでいくのを見た。しゃぼん玉が消えるまで見ている。自分の手でこわすのもある。面白くやっているなと思って私は見ていたが、間もなくS夫



は容器の液を全部こぼしてしまった。

それからS夫はえのぐのびんを出してきて、私にふたをあげさせ、水道の水を強く出してえのぐを流出させた。流しにはいろいろな色水が渦を巻いてゆっくりと流れた。私はしばらく立ち去って部屋にもどると、彼はビニールの水袋を床の上で踏みつけて破り、床はすでに水びたしになっていた。昨年は動きが少なかったS夫が、こんなに思い切ったことをしているのを見て、私は嬉しく思い、ひたすら床掃除に従事した。この水袋は、他の子どもが庭で水をつめて作り、先生に口をしぼってもらっていたのである。

この日のS夫の動きは、これまでの経過を知っている私にはとても面白く思えた。だが、この話だけでは、この子どもを知らない人には、ただそういう事実としてだけしかうつらないだろう。これを面白いと思うのは、以前には動きの少なかったS夫の過去と重ね合わせるからだろうか。それもあろうが、それだけの理由ではないように思えて、私は夕飯のとき妻にこの話をした。彼女は直ちに、それだけの理由であるはずはないと言った。たしかにそうだ。保育のひとつまひとつまは、過去のことには知らなくとも、そのひとつの中に意味が含まれている。それなのに、ときどき、保育者にはそれが見えなくなってしまう。しゃぼん玉について、以前から思いをめぐらしていた妻と対話しながら、私はあの子の子についての経験といっしょに、この日のことを考えた。

しゃぼん玉を吹いてふくらますこと。しゃぼん玉は、息をするだけでふくらむ。息をするだけで、

何かをやったということが目に見えて、自己実現の感覚を得る。

しゃぼん玉は、見ているうちに消える。ふくらみ、ひとりでに消滅するものには、生命性が感じられる。

しゃぼん玉の液をこぼす。液をこぼすとしゃぼん玉はできなくなるから、大人は液をこぼさないように注意する。もつとふくらまそうとさそう。しかし、いろいろの子どもを見てみると、ふくらまずことによる自己実現を自ら断念し、それをこぼして使えなくする子どもが何人もいる。

H子は、隣に坐る子どもがしゃぼん玉をやりはじめたとき、他の子がしゃぼん玉の自己実現をするのを見るのはいやだった。他人の自己実現の傍で、自分がその影にされることを拒否した。S夫は、しゃぼん玉をもつとつづけさせようとする大人の期待に挑戦するかにように、液を全部こぼした。

えのぐを水で流出させる。えのぐは、筆につけて描くことを期待させる。えのぐをそのように使うのでなく、水で流出させてしまうとき、大人は思わず制止する。しかし、ある子どもたちは、大人の期待に沿ってえのぐで描くことに反逆する。ところが、その子どもたちも渦を巻く流れの色とりどりの美しさにひきつけられて、そこに魅せられてしまう。描くのととは別の美を発見している。

水袋を割ってあたりを水びたしにする。水袋は他の子がビニール袋に水を入れて、しゃぼん玉のようにふくらませたものだった。S夫はそれを足で踏みつけ、その結果流れ出てきた水で遊びはじめた。何もしないように見えたS夫が、床を水びたしにしたのである。私はこの子がこれをしたことをうれしく思った。

こう考えてくると、この日の保育のひとつまの中で、子どもたちは実に意味あることをしていたことがわかる。いきをするだけでしゃぼん玉をふくらませ、自己実現の感覚を体験している。また、液をこぼすことにより、大人が期待する方向の自己実現を拒否し、全く違うことに自分の世界を見出している子どもがいる。私は前者を実の自己実現、後者を虚の自己実現と呼んだ（拙著、「子どもの世界をどうみるか」NHKブックス）。大人の世界にも同様のことがある。世の中の役に立つ仕事をする傍に、役に立たない種類の活動が展開する。文学や思想はその類のことともいえよう。人々が集まる場で生じるこの力動性を無視したら、そこは、ある子どもたちには住み心地がよくとも、別の子どもたちには居心地のわるい場になるだろう。

この日の保育を、私が面白く思ったのは、生きた子どもの世界の意味が潜在的にふくまれているからであった。その意味をことばで示すことができるとき、その日の保育の当事者にとって面白いだけでなく、だれにとっても面白いものとなるだろう。子どもたちがすることは、その子たちにとって意味あることであるという認識に立ちもどり、そこから見直すとき、毎日の保育の現象は一回限りのものでありながら、私共は人間に共通の普遍的なものをそこに発見することができる。

（愛育養護学校）

## 保育の原点を考える

柴崎 正行

はじめに

五回に渡って連載されました倉橋惣三の「保育法」講義録を読み終えて、今更ながら保育の原点について考えさせられたような気がしています。私は現在、文部省の教科調査官という立場にありますが、本年三月に改訂告示されました新幼稚園教育要領の来年度実施を控えまして、現場の先生方にその内容を理解していただくという役目を担っております。今回の新幼稚園教育要領においては、幼稚園教育の基本を明示したという点で、まさに保育の原点を見直そうとするものです。その渦中に身を置く私にとって、この講義録との出会いはまさに保育の原点とは何かを考えるための格好のテキストとなりました。そこで私なりに考えたことをいくつかのテーマに沿いながら、思いつくままに感想を述べさせていただきます。と思います。

### 一、保育方法の原理

実際に保育をする場合の原理として、「自発的」と

「具体的」という二つの側面をとりあげています。幼児がなぜ「自発的」なのかという疑問に対しては、効果意識がなく今の生活に夢中になれるからと述べています。周囲の人からどのように思われるかということを意識することなく、自分の心に率直に生きていることが自発性を生み出しているのだというのです。それを無邪気という言葉でまとめています。

今回の幼稚園教育要領においても、幼児の自発的な活動というものをとても重視しています。でも、子どもの行ういたずらや落書き、けんかなどを無邪気さの現われとしてとらえ、自発性として認めてくれる保育者は少ないのではないだろうかと感じさせられます。自発的な活動はいいのだが、いたずらは困ると感じる気持ちがあるとするば、子どもの自発性を認めていることになるのであるうかと考えさせられています。そのように考えると、どうも自発的という言葉が現在では保育者の望んでいる方向に対してのみ許されているのではないかという危惧を感じます。その一方で望まない方向に対しての

自発性までを認めていたならば、保育がまとまらなくなるので困ることになります、という保育者の訴えもわかる気がします。自発性は認めたい、でも保育のまとまりもほしいというこの矛盾した気持ちを解決するには、誰のために保育をしているのかということが問われている気がします。すなわちまとまりのある保育がよいのだという前提が問われているのだと思います。そこをしっかりと問い直さないと、いたずらをしたり、けんかをしたりとして本当は自発性に富んでいる子どもが、困った子、問題のある子として否定されていくことにもなりかねません。私は自分でも無邪気さを持った保育者に出会うと、何かとても救われた感じを抱くのですが、こうした無邪気さの大切さを改めて確信した気がしています。

保育方法の原理としての「具体的」ということも、これまでずいぶんと強調されてきました。でもそれは多くの場合、子どもの認識の仕方の特徴として述べられてきたような気がします。このノートでは具体的という言葉を子どもだけでなく、保育者の子どものとらえ方にまで

広げて述べてあります。遊ぶときにはその子どもの全体と、自分の全体とが遊ぶべきであるという主張には、時代を超えた重みがあると思います。子どもは他人にすぐ全体を持って来ることができないが、大人は反対に全体的にぶつかることが難しいという文章は、私にとってもうなずけることでした。幼児は自分を抽象することができないので、全身でぶつかってきます。ですから大人も幼児を抽象して△分析▽してとらえるのではなく、全身でぶつかってとらえる必要があり、それが一緒に遊ぶということであるという説明はとても明解だといえます。子どもと遊ぶことが楽しいということは、全体が子どもにふれた時なのであるという一文を、私たちは自分の保育を反省するときの重要な視点として位置づけていく必要があるのではないのでしょうか。今日の保育が楽しかったと思えたとき、それは自分にとって充実しているだけでなく、幼児にとっても充実していることにもなります。保育における楽しさとは何か、この点をもっと追求してみたいと思います。

## 二、保育法の則

幼児の生活の基になっているのが原理であり、これは動かすことはできないが、原則は実際の方法に近いものであるからその位置が自由であるという説明には、そのようにとらえるのかと参考になりました。

第一原則として述べられている間接教育という考え方は、今回の幼稚園教育要領において幼稚園教育の基本として位置づけた「環境を通して行う教育」という考え方も類似しており、その内容には強い関心を持ちました。そして幼児の自発性を大切にしながら、保育者の熱心な思いを実現していくためには直接ではなく間接が大切であり、子どもがそうしたくなるように、その思いを一杯物に含めて待つ事が肝心であるという説明を読んで、少しほっとした気がします。というのは、今回の基本におきましても、幼児の主体性と教師の意図性とを無理なく両立させるためには、環境を媒介にしておくことが必要であるという立場をとっています。ですから考え

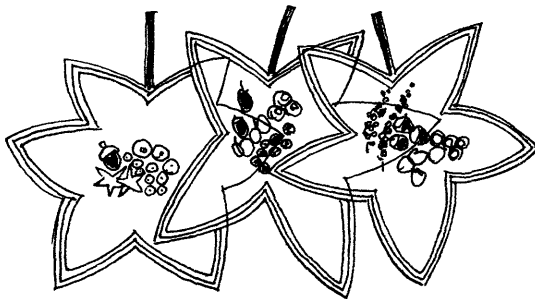
方としてはほぼ符合しているといえると思います。ただ今回の基本においては、環境として物的なものだけでなく、人的な側面や、時間や空間、雰囲気なども含めた総合的なものとしてとらえたので、その辺が間接教育の中にどのように含まれているのかとても興味をもちました。そのようにとらえてみると、間接教育の原則では物的環境についてそれも設備や品物などを媒介にすることを主張しているように思えます。人的な面は含んでいません。それは次の第二原則として位置づけられています。

第二原則として述べられている相互教育の原則は、子ども相互の関係を仲立ちにすることであると説明されています。それは子どもが共に生活する中で相互に活力を出し合うことにより、育ち合っていくことを利用することであり、保育者は数人を数人として相互生活をさせるような優れたマネージャーとしての役割りを果たすというものです。これは人的環境の中でも子ども同志の育ち合いの側面であり、保育者はいってもその存在を感じさせ

ないような存在でなければならぬとされています。

第三原則として述べられているのが共鳴の原則です。

ここにおいて保育者がどのようにして自分の願いを幼児に伝えていくかが説明されています。間接教育や相互教育の原則では、保育者は子ども全体をマネージする存在でしたが、共鳴の原則では保育者が直接子どもになすべ



きことを示しています。その方法としては、人間の良い心持ちに沢山共鳴してくれる先生と共に暮らす子どもにもは、善が良く育つのであるということを述べています。

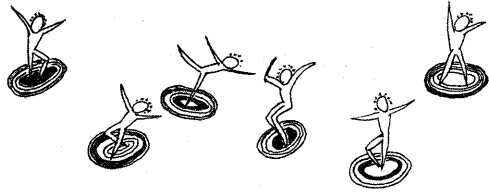
このことは子ども心の動きに沿いながら、良い心持ちにのみ共鳴してあげることができています。何に共鳴するかということにより、保育のもつ願いを子どもに伝えていくわけです。これは今回の幼稚園教育要領の基本の部分に、教師の心がまえとして述べてある「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共に、よい教育環境を創造するように努めるものとする」という文章と関連しています。しかしながらここでの共にといい意味は、教師が一方的に何がよいかを判断するというようなものではなく、何がよいのかは幼児と教師が一緒に考えるという意味ですので、その辺がやや違うのかも思えます。ノートの文章から判断すると、何を良い心持ちとするかは保育者に決定権があるように感じられます。

第四原則として、生活に依る誘導の原則が述べられています。これは生活する中で先生の姿を通して幼児を

導いていくという考え方であり、教師も環境の一部であるとした今回の幼稚園教育の基本とも符合しています。

以上のような保育方法の原則についてまとめてみますと、大まかにとらえるならばその考え方についてはほぼ共通していると言えらると思います。保育者は幼児の自発性を大切にするために、物や友だちそして自分の生活を展る姿などに自分の願いや思いを込めて、日々の保育を展開していくという点については共通していました。しかしその物的な側面のとらえ方が、設備や品物という範囲に限定されていたのは、やはり幼稚園という場所での何をやっているのかは、その時代にに応じて求められるものが異なるということでもあるのでしょうか。今回は物的な面として自然や動植物なども含めてあります。それはそうしたもののとのかかわりが、近年とても減少してきており、そうしたもののとのかかわりを幼稚園という場において体験しておかないと、家庭や地域では難しくなりつつあるという時代のニーズがあるからでしょう。





このように基本的な考え方では共通していても、その中身は時代によって変化してきているといえます。しかし、保育方法を四つの原則に分けてとらえていくという方法は、「環境を通して行う」という一括したとらえ方よりもずっと理解されやすいのではないかというのが素直な気持ちです。特に今回の基本では、教師も環境の一

部であると位置づけたために、教師自身の気持ちをどのように幼児に伝えればよいのかわからないという声も聞かれます。それについては第三の原則である「共鳴の原則」や第四の原則である「生活に依る誘導の原則」ということが教師の願いや思いを実現するための方法として、環境と区分して位置づけられた方が、わかりやすかったのではないかと感じています。

### 三、表現について

まだふれてみたいことはたくさんあるのですが、紙面の都合もありますので最後に表現ということについて感じたことを述べてみたいと思います。

まず表現とは「活動の結果がある形を現しにくる」と定義した上で、表現活動を自分自身を表現する活動と、物に表現する活動とに分けてとらえています。こうしたとらえ方は、新幼稚園教育要領においても共通しています。表現する意欲はもともと自分自身の思いを表現することから高まっていくものと考えられますが、領

域名を音楽リズムと絵画製作としたことから、表現技能の指導ばかりが強調される傾向を生み出しました。そこで今回の改訂においてはこうしたとらえ方はせずに、表現する意欲や感性の育ちを見る領域として「表現」という領域を編成しました。しかしながらこの表現という身をどのようにとらえたらよいのかわかりにくいという声をあちこちで聞きます。この点については、まだ必ずしも共通理解されているとは言えない面も残されているように思えます。そこで倉橋惣三の説明に沿いながら、表現について考えてみましょう。

まず表現とは、人に伝える事をのみ言うものではないとした上で、人に伝える前に内面的のものが自分自身にわかることの大切さを説明しています。そして幼児においては、伝えるのが目的でなく、表現することにより自己満足を得ることが大切であるとしめます。しかしこうした自己満足を得るためには、自分自身の心の中にあるものを一度形に現してみることににより、それを改めて感じることの必要性を説いています。

この説明によれば、自分の心の動きを何らかの形として外に現すことが必要になります。その方法として生活の中で、心が動かされ現したくなった時に心の動きに応じて表してみることが主張されています。そしてどのような時に幼児の心が動かされるかという視点から、芸術的誘導と産業的誘導の二つに分けてとらえています。

芸術的誘導とは、物を見たりふれたりすることにより、あるいは作っている様子を見たり、作られた作品を見たりすることなどにより、自分でも表現したいという衝動が湧いてきて表現するというものです。

産業的誘導とは、作るということが、子どもの心の必要感から生まれてくるものであり、たとえば人形のために何かをつくってあげるとか、お店やさんごっこをするために何かをつくるというように、目的をめざしてつくるといふ衝動が湧いてきて表現するというものです。

こうした自分の内面から湧いてくる気持ちにもとづく表現を大切にしていますが、それには劇的なものや音楽的なもの、語ることなども含まれています。遊戯の項

に、音楽も歌わせるのでなく、歌いたい心を満たしてやること、遊戯も表現したい気持ちをも本体として共通したと述べていますが、これこそが表現活動すべてに共通したとらえ方であると思えます。そして幼稚園の遊戯は、自然的なものであり、芸術に勝ちすぎずに子どもの遊戯といふことを本体とし、巧みか否かは問題ではないという指摘は、現在の表現活動の指導の在り方にも通ずる指摘であると言えるでしょう。

表現をこのようにとらえてみると、幼児に対する表現の指導とはどのようなものか、かなり明確になると思えます。

おわりに

以上思いつくままに書かせていただきましたが、すでに五十年以上前から主張されていた保育の原理、原則、とらえ方などが、今でも十分に共通理解されていないという現状を考えると、なぜなのだろうかという疑問が心に浮んでおります。今回新たに改訂されました幼稚園

教育要領においては、こうした倉橋惣三の考え方がかなり盛り込まれています。しかしこうした理念はわかるのだが、実際の保育をどのように行えばよいかかわからなという声が多いのも事実です。そうした声の背景にあるものは何なのでしょう。保育は教科書を見て、その通りに行えるものではありません。日々の保育を反省し、子どもから学びながら自分なりのテキストをつくり出していくことが必要となります。誰かに教えてもらうだけでは、本物の保育は行えないでしょう。その意味では、今回の教育要領の改訂においては各々の保育者にとっての、保育の原点が問われているのかも知れません。

(文部省初等中等教育局幼稚園課)

## 子どもは自力で乗り越えるもの



田中三保子

新年度が始まり、三才児20名の受け持ちとなりました。

今度の組には、母親と離れるのをいやがって泣く子がたくさんいました。シクシク、メソメソといった泣き方でなく、驚くほど大きな声でワァーと泣きます。抱きとってなだめてあげようとする私の手を振り払い、「ママがいい」、「ママのところに行きたい」と泣き続けるのです。

Rくんはそんな子どもの一人でした。母親から引き離されることへの不安が余程強いのでしょ、母親がすぐ

そばにいてくれないと大声で泣きます。(間もなく下の子が生まれることが影響していたのかもしれませんが)少し離れたところで見守っているのではとても安心できない様子でした。当然のことながら、私は母親から自分を引き離す存在として映っていたようです。私がそばに寄っていくと母親にしがみつき、私を叩いて拒否しました。しかたがないので、母親と一緒にいてもらって様子をみることにしました。

登園すると決まって大声をあげて泣きますが、母親のそばににいるうちに落ちついてきて、まわりの子どもたち

の遊ぶのをながめていたようになりました。そして、日が経つにつれて、母親にそばで見えてもらえば遊ぶようにもなってきました。けれども、帰る時になると、登園時と同じように泣き出してしまいます。玩具を片づけ、椅子を並べ出すと泣き始め、先まわりして玄関で待っている母親に手渡すまで、大声で泣き続けます。

いつになっても泣かなくなる気配がみられないので、母親は、園庭の外から見たり、玄関の椅子に座って待っていたりなど試みたようですが、その度にRくんが泣きながら母親を求めて出ていってしまうので、結局、またへやで一緒に過ごさざるを得ませんでした。

五月の初めになって、やっと泣かずに帰れるようになりました。そしてある朝、Rくんの後におばあさんの顔が見えて、私は思わずかけ寄りました。母親が一緒なので、ひどく泣かれるのではないかと心配になったのです。ところが、彼はにこにこことへやにはいつてきました。私と一緒に手洗いとうがいをするせるとブロックで遊び始め、心配顔のおばあさんには一度も視線を走らせ

ませんでした。

この日からRくんは泣かなくなりました。今までそれほど手こずらせてくれたのが嘘のようです。一体いつまで泣き続けるのだろうかと正直なところ憂うつになり始めていた私は、本当に安堵しました。毎朝のRくんと一緒に母親の顔もとても晴れやかになりました。

それから二週間ほどが経ちました。ある日、砂場で遊んでいたRくんが、「幼稚園にお泊まりするの」とボソッとつぶやいたのです。それほど幼稚園が気に入ってくれたのかしらと嬉しくなると同時に、ひよっとしたら帰りたくないとの意志表示かもしれないと心配にもなりました。案の定、帰りましょうとの呼びかけには知らん顔で、何度誘いかけても砂場から離れようとはしませんでした。やむなく抱きかかえて靴をはきかえさせようとするワツと泣き出し、とめられなくなってしまいました。泣きじゃくりながら帰っていくRくんの後姿を見送りながら、ひどく気が重くなっていくのを感じました。今まであれほど頑強に母親と離れることを拒み通してきた

た彼だから、幼稚園がよくになったら、今度は帰ることを拒否し続けるかもしれないという気がしたので。それだけでなく、もっと遊びたくて帰るのをいやがって逃げまわる子が、すでに一人いるのですから。

翌日はお誕生会でした。先月のときとはうってかわって、Rくんは機嫌よく劇などを見、おやつを食べ、砂場で遊び始めました。昨日のことがあったので、心配しながら帰りの声をかけたのですが、驚くほど素直にへやにはいつてきました。そして「アメ食べるの」と私に言いに来ました。なるほど、おやつの残りが食べたくてすんなり戻ってくれたと合点がいきました。戻ってくれたことは喜ばしいのですが、食べてもよいというわけにはいかないのです、「おうちに帰ってから食べましょうね」と断りました。その途端、昨日と同じように泣き出してしまいました。どうなだめてもひたすら泣き続けます。そして、玄関に行く途中、廊下に座りこんでしまいました。子どもたちがみんなさよならをした後、なおも泣き続けるRくんを抱きかかえて、やっとのことで母親に手

渡したのですが、すぐに戻ってきてまた座りこみます。呼び戻してきた母親を拒み、「帰らない」の一点張りです。何とか帰らせようとする母親を叩き始め、「ママきらいだ」「ママ死ね」と泣きわめきます。その同じことをばも私も浴びせられたことがあります。あのときは、母親から自分を引き離そうとしている私が憎らしかったのでしよう。今は、こんな楽しい幼稚園から自分を連れ去ろうとする母親が疎ましく思えたにちがひありません。

このままではどうにもならないような気がして、とりあえず、母親にはRくんの見えないところで待っていてくれるように頼みました。まだ泣きじゃくるRくんを前に、どうしたものかと思案しました。ひとりぼっちにしたら、心細くなって母親が恋しくなるかもしれないと考えて、言ってみました。「お友だちみんな帰っちゃったでしょう。先生ももうすぐ帰るから、幼稚園は誰もいなくなっちゃうの。」それでも頑固に「帰らない」を繰り返します。へやの灯りを消し、「先生も帰ります」とR

くんをひとり廊下に残して、職員室に姿を消してみました。どうするかしらとそっと見ていると、彼はへやにかけこんだままいつになっても出てくる気配がありません。心配になってへやにいったみると、真中にRくんがつっ立っていました。もう泣いてはいないようです。大丈夫かなと思って帰るといふことを口にする、表情を固くして「帰らない」と言い張るので、しばらく様子を見るよりほかはありません。私がお皿を洗っている、Rくんが近寄ってきました。花台の向こう側に立って私をじっと見えています。しばらくすると花台の引き戸に興味をもったようです。「これ開くの?」「何がはいってるの?」「あつ、開いた。」「お薬があつた。」「引き戸をいじりながら話しかけてきました。お皿を拭きながら私も返事をします。やつと気持ちが落ちついてきたように見えました。近寄って思い切って抱きあげました。今まで一度もおとなしく抱かせてくれなかったのに、ちょっと抵抗しただけで、でも泣きながら抱かれています。「ママが待っているから帰りましょうね。」と言いな

母親のところに連れていくと、母親の膝にワツと泣き伏してしまいました。母親に抱きとめてもらうと、安心してように顔をうずめてシクシクと泣いています。私もやつとほっとした気持ちになりました。

あれから一週間余が経ちました。Rくんは兄となり、二人のおばあちゃんに交代で連れられます。私の心配をよそに、彼はにこにこ登園し、友だちと淡いながらもかかわり、帰りましようときし出した私の手をにぎってくれるようになりました。あの日、Rくんは思い切り泣いて自分を押し通しました。そうすることで、自分のこだわりをひとつ振り切ってしまったように私には思えます。

子どもは、自身の内部にひそむ成長への障害を、自分の力で、時に鮮やかに乗り越えていくものだと、ことを、改めて感じさせられました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

津守 真著

『保育の一日と  
その周辺』

（フレールベル館

'89・5）

友定 啓子

これまでの氏の著作の中心になってきたものは、氏によって開示される幼い子どもの内面の世界の豊かさ、深さであった。私たちは、そこで示される世界に魅せられながらも、どのようにしたら、そのような理解が可能になるのかということをも考えさせられてきた。

今回のこの書物の中でそのことがまとまりを持って示されている。氏は、「子ども学のはじまり」から、「保育の体験と思索」「自我のめばえ」「子どもの世界をどうみるか」そして今回の「保育の一日とその周辺」にいたるまで、一貫して、子どもの世界を表わしながらも、同時にそれをささえる保育者としてあるいは研究者としての自分を語り続けていたのだが、どこか「哲学」に近い印象があった。しかし、氏は今回はじめて、それは哲学ではなく「保育学」であることを表明している。

「哲学」に思われたのは、特に個人的な思想やものの考え方に見えるというより、おそらくそのすぐれて個人的なところに原因があったのだろう。また人間学的な深さもその要因であったろう。「保育」という子どもと大



人のかかわりの中に、人間の根源的な姿を見いだすからであろう。それは私たちが「保育」や「教育」というとどうしても何か決まったよいやり方があるかのような、方法的なイメージを抱いてしまっていることも深く関係があるだろう。その近視眼的期待にこたえないからでもある。

氏は、最近「保育的關係」という言葉を使っている。

この書物にも出てくるが、子どもが存在感を感じ、あるがままに受け入れられたと感じる快い雰囲気を創ることによって、その中で子どもは自らの内的世界を演出することができると子どもとの関係のことである。大人の側から言えば、子どもがあるがままに受け入れることが要請される。しかし大人は、意味のとれないことは認めようとしない傾向があるので、意識して、子どもの行為の意味を理解する努力をしなければならない事態に至っている。生活の中で、あたりまえに子どもに寄り添い、その喜びや悩みを共有することは、そう難しくはないはずだが、「科学的孩子も観」の潤歩する現代ではなみた

いていのではない。

「出会うこと」「見ること」「交わること」「物質のイメージ」「省察すること」からなる第一章「保育の一日」は子どもと関わるとはどういうことかが示される。子どもと生活を共にしている読者は、日頃なにげなく自分がつけている行動に深い意味があることに気づくに違いない。また、他の章では氏の「周辺」が時空間的に限りなく広いことにも驚かれるだろう。

「保育の専門家とは、他者とかかわり他者を育てることを、実践においても思索においても、自らの人生の課題として負うことを選択した者のことである。」（間章「自我の力としての保育」より）

（山口大学）

# 昆虫——小さな世界

高家 博成



はじめに

昆虫はイヌやネコなどと同じように、私たちの身近に見られる動物です。しかし、イヌやネコなどに比べると、はるかに小さな体です。昆虫のなかでも大きいと思われるカブトムシだって六グラム位しかありません。子供の手の平に乗ってしまいます。昆虫の標準的な大きさは体長にして一センチ、ちょうど家の周りにいるクロオオアリ位です。人間に比べると身長のおよそ百分の一、体重にすれば百万分の一にしかなりません。いったい小さい世界とはどんな世界なのでしょう。私たちが昆虫ほどの大きさになったとしたら、どんな感じがするのでしょうか。昆虫の体のしくみやくらしぶりから想像してみましよう。

○大きな昆虫・小さな昆虫

一昔まえ、巨大なカイコの登場する「モスラ」という映画がありました。記憶にある方も多いでしょう。実

際にあのような大きな昆虫は存在したのでしょうか。

地質時代も含めると、かなり大きい昆虫も知られています。古生代石炭紀の地層からは、羽を広げると七十センチにも達するメガニウラというトンボが出ています。

現在知られている大きな昆虫は、チョウではニューギニアのアレクサンドラトリバネアゲハのメスで、開張（羽を拡げた大きさ）が二十二センチ、甲虫では中南米のヘルクレスオオカブトの全長（頭の角の先からおしりまで）が十八センチ、セミではボルネオなどに棲むテイオウセミで、全長十一センチ、ナナフシではアフリカのケンタウルスオオトビナフシの三十センチというものがあります。しかし、ほかの獣や鳥や魚のように、大きな昆虫というものはいません。

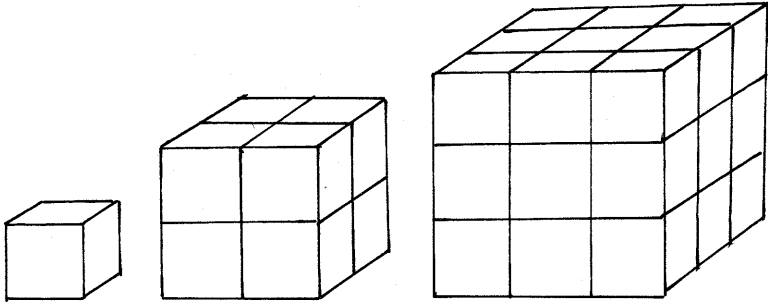
逆に、体長が一センチに満たない昆虫はたくさんいます。小さな昆虫の代表は、ほかの昆虫に寄生するヤドリバチのなかまです。なかでも昆虫の卵に寄生するホンバネヤドリバチのなかまには体長が〇・二五ミリしかないものも知られています。

### ○昆虫はなぜ小さいか

昆虫は体の中に骨はなく、皮膚が骨の代わりに体を支えています。筋肉は皮膚の内側についていて、体を動かします。皮膚は私たちの爪のように蛋白質でできています。その組織はベニア板を重ねたような構造になっていて、薄くても丈夫です。さらに、体や足はドーム形や筒形になっていますが、これは材料が少なくても、外からの圧力に強い構造になっています。カブトムシは高い木の上から落ちてもけがはしませんね。

この硬い皮膚は、成長に伴ってごくわずかしか伸びません。そこでときどき皮脱ぎをします。このとき、体があまりにも大きいと、新しい柔らかい皮膚は内容物を支えきれず、破れてしまいます。もし、同じ形で体長が2倍になれば、体重は8倍にもなるのに、表面積（皮膚）は4倍にしかありません。ちょうど水を入れたゴム風船を想像してみてください。重い体をささえるには、皮膚も厚くする必要があります。皮膚が厚くなるとさらに重

体長	1	:	2	:	3
表面積	1	:	4	:	9
体重	1	:	8	:	27



▲図1 体長、表面積、体重（体積）の関係

くなり動きもぶくなるでしょう。昆虫と同じ硬い皮膚をもつ海の中のエビやカニの中にはかなり大きくなるものがあります。これらの動物の脱皮のときは、海の水が重い体重を支えてくれます。

昆虫の体の大きさを制限するもう一つの大きな理由は気管による呼吸のためです。昆虫の血液は養分やホルモンは運びますが、酸素は運びません。血管も発達せず、心臓は背中を通る一本の管で、体の中を自由に流れる血液の方向を決めるぐらいの働きしかできません。体の組織は栄養やホルモンはすぐに必要としませんが、酸素はすぐに必要です。そこで、体のところどころに開いている気門という穴から空気を取り入れ、気管という管で体のすみずみまで空気を送り、酸素を吸収しています。体の関節を伸縮させて空気の流れを作るほか、自然な拡散によってひろがります。しかし、体が大きくなると、気管の枝分れもふえ、長さも増し、酸素は奥の方までとどきません。体は長い昆虫でも、幅は狭いはずで

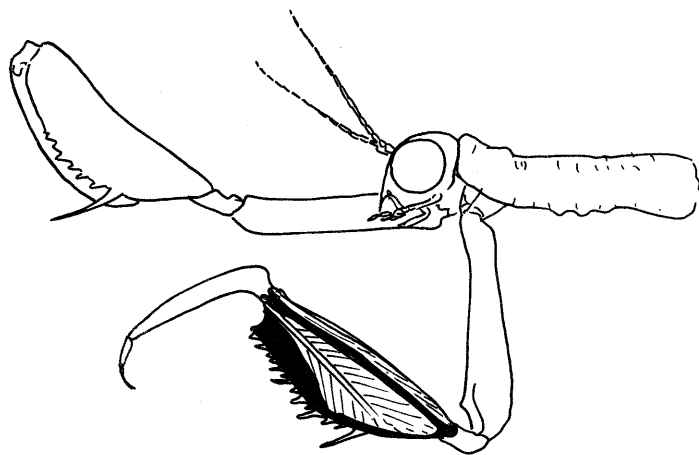
○小さくても力持ち

小さなアリが体の何倍もの大きなたべものを運んだり、カブトムシに重なおもちゃの荷車を引かせたりしているのを見ると、昆虫ってなんと力持ちだと思われることでしょう。筋肉の太さ以外の条件がみな同じだとすれば、筋肉の太い人の方が力持ちのはずです。しかし、昆虫の足はそれほど太くできていません。どこに力の秘密があるのでしょうか。

作用を受ける節のねもとから、長いけんが出ていて、そこにたくさん筋肉の繊維がつき、固い皮膚に向かって幅広く接着しています。つまり、足は細くても、筋肉は幅広い断面をもっているといえます。もし私たちが昆虫と同じくらしいの大きさになって力比べをしたら、かんとんに負けてしまいます。

○早いスピード

昆虫は体が小さくても、丈夫な6本の足と4枚の羽を持ち軽いかかげで楽に飛んだりはねたりできる動物で



▲図2 カマキリモドキの前足の筋肉

す。そのため、広い自然を広く使うことができます。あちこちにすばやくひろがったり、餌を見つけたりできます。高い山でもビルの屋上でも昆虫の姿をみかけます。おべんとうをひろげるとすぐにやってくるのはハエですね。このようなことは、動物として誠にすぐれている性質で、ほかの小さな生きもののまねのできないことです。

### ○昆虫をとりまく世界

体が小さくなると、周りの世界もずいぶん違って感じられることでしょう。私たちには小さな草むらに見えても、アリたちにはジャングルのようでしょうし、水溜りだって大海原でしょう。そよかせだって台風のようにしょうし、雨粒は爆弾と同じかもしれません。人や車は巨大な怪物で、もし昆虫が知能をもち、これらの怪物の正体を知れば、恐怖のため、一歩だって巢から外には出られないでしょう。小さい世界とは、長さや重さが違うだけではありません。まったく別の世界なのです。

### ○昆虫と風

体が小さくなると、相対的に体表面積は大きくなり、風の力も大きく感じられるはずで、昆虫は風の強い日には、飛ぶのをやめてしまい、木や草陰で休みます。しかし、台風などのように強い風にあおられると、吹き飛ばされてしまい、思わぬほど遠くまで運ばれることがあります。九州や沖縄などの日本の南岸では、台風のあと、しばしば東南アジアの島々から運ばれてきたチョウが採集されることがあります。昆虫学者はこれを迷蝶と称し、チョウの分布の貴重な参考資料にしています。小さな島に棲む昆虫の中には、風に飛ばされないよう羽の退化してしまった昆虫もたくさんいます。

昆虫の中には元から羽を持たない昆虫もたくさんいますが、ふしぎなことに空の高いところでも見つかったいます。飛行機の後ろに捕虫網をつけて、さまざまな高度で昆虫の採集を試みた学者がいます。その報告をみると、ハエ、カ、甲虫、ハチ、バッタなどのほかに、羽の

ないトビムシ、ダニ、クモまで含まれていました。クモは昆虫ではなく、羽は持っていないませんが、積極的に風を利用して空中旅行をします。生れてしばらくした子グモは、微風の吹く良い天気の日、草や木の葉先に上っておしりから糸を流し、風に乗ってかなり遠くまで飛びます。ときにはこの糸がたくさん流れていくのを見ることがあります。この糸を英語ではゴッサマー（マリアの紗の意）とかエンゼルヘアと呼んでいます。

### ○昆虫と水

水は空気のように拡がらず、集まって膜を作ります。この膜に、水に濡れないものが触れるとおし上げようと、逆に濡れるものが触れると、中に引き込もうとする力が働きます。私たちにはさらさらとしてみえる水も、小さな昆虫にとって、この水面の力とはとても大きく大きな力となります。昆虫の体の表面は、一般にロウのような物質で覆われ、水に濡れにくくできています。さらに体表に生える細かい毛は空気を含み、水に濡れにくく

なっています。これはサトイモやハスの葉の上の水が、葉に濡れないので玉になっているのと同じ原理です。しかし、昆虫の体にも、水に濡れやすい部分があり、水面



▲図3 水にぬれないもの（左）とぬれるものの水面現象

に体がくっつき、どうしようもなくなります。これは私たちが水飴の池に落ちたようなものでしょう。

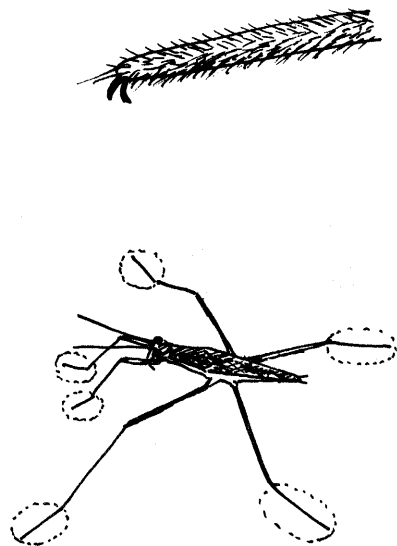
もし昆虫が水溜りに落ちたらいへんです。昆虫は息をするための気門が体の節々に開いています。この穴が水でふさがれると、息ができずに死んでしまいます。

#### ○アメンボの水面生活

水面で生活しているアメンボやミズスマシは、このよ  
うな水面に落ちた昆虫を食べて生活しています。それで  
は、いったいなぜアメンボたちはおぼれないのでしょ  
うか。

第一にアメンボの体はとても軽いことです。普通に見  
かけるアメンボは二十〜三十ミリグラムです。もつとも  
大きいオオアメンボでも四十ミリグラムしかありません。  
一円玉がちょうど千ミリグラムですから、50分の1  
から25分の1しかありません。

第二に足にはたくさんの水に濡れない毛が生えていて  
空気を含み、水面に浮くことができます。



◀ 図 4 アメンボと足の先



私たちがアメンボになったとしたら、水面はちょうどトランポリンの上に乗ったように感じられるでしょう。

しかし、ただ水面に浮いているだけでは、泳ぐことができません。そこで、各足の先にある一对の爪はするどくどくつき、水に濡れ、これを水面につきさし、ひっかくようにして泳ぎます。泳ぐための足は長い中足で、これをオールのように使います。水面の足の接している面を見ると、丸く凹んで見え、しっかりと足を支えている様子がわかります。六本の足の先にできた丸い水面の凹みは、日光のあたるよい天気の日に見ると、水底に丸く黒い六つの影を落としていることに気がつくでしょう。この影を見ると、三つになったり、四つになったりしますが、その様子からも、アメンボのしぐさをうかがうことができるでしょう。

水面は衝撃を受けると波を生じます。アメンボはこの波も利用しています。虫が水面に落ちてもがいていると、ちいさな波ができます。アメンボの足の先には波を感じる毛が生えていて、虫が浮かんでいる場所を知りま

す。また、繁殖期になると、オオアメンボのオスは足を細かく水面で震わせ、波を起こしてメスを呼びます。波の愛の言葉と言えますね。

#### あとがき

私たちは自然を見ると、どうしても自分たちの目線で見たり考えたりしがちです。しかし、皆さんも子供のころ台所や父母の机や洗面台の高さがずいぶん高かった思い出があるでしょう。自然の中には、小さきまじな世界がありますが、単に大きさの大小ではなく、それぞれの異なった世界があるでしょう。私たちはより広い視野で自然を見直し、理解していききたいものです。

(多摩動物公園)

# 子どもの絵あれこれ（下）

川崎 千束

加藤周一著の『羊の歌』に、

「子どもの私はその小さな旅行を待ちのぞみこの上もない楽しみとしていた。汽車が荒川の鉄橋を越えるときに、私のもうひとつの世界がはじまる。鉄橋を渡る車輪の規則的な音が俄かに高まり、私はいつもの生活の時間表から、そのとき、決定的に解放されるのを感じた。私が今離陸したばかりの旅客機の中で味う感覚は、小さい私の荒川鉄橋の感覚と少しもちがわない。」

私も、右の記述と同じような解放感を、最初の外国旅行の機中で味わいました。

家庭生活から、職場からの解放感は、新たなエネルギーとなって、「さあ、新しい生活

がはじまる。」と、むくくと湧く雲海のように希望が湧きました。

私の幼稚園生活が楽しくなかったのは、この解放感のなかったことで、制御されたプログラムで、朝の会集から降園まで、羊の群れのような生活態でした。こんな退屈な生活が幼児期にあってはならない。楽しくいきいきとした園にしたいと強く念願しました。そんな園なら、イマジネーションも、夢見る思いも培われ、描く絵も情感ゆたかなものになる。……と。

『銀の匙』の前篇に記されている伝馬町の牢屋あとの見世物や露店の様子を読んでいくうちに、私の幼い日の観音様のお会式えしきがなつかしく回想され、大好きだったミタラシ団子や肉桂棒の味さえ甦よみがえってきました。覗きカラクリ、天勝のマジック、猿芝居、バナナの叩き売りの真似をしたりなど、幼稚園以外の友だちとの遊びは楽しく遊び呆ける程でした。私の郷里の祭りは、山車だしも出るので、稽古の笛太鼓の音が、きこえ始めると胸ときめかして、祭りの日を指折り数えて待ちました。

『銀の匙』の後篇の小林寺の境内で貞ちゃんと遊んだ自由な天地の描写。蟬とりにうき身をやつしたり、凧あげ、栗ひろい柿もぎ。それらは、私の子どもたちとその友だちとの田舎生活で、季節毎に繰り展げた遊びの姿そのものです。読み了って溜息が出ました。私が接している子どもたちは、ここに記された○○君のような、或は私の幼時期のような自由で楽しい遊び、心奥から喜びの湧く経験をしているであろうか。……と。

〇〇君の伯母さんがベビーシッターから家庭教師の務めまでこなし、且つユーモリストで「四天王か」「清正か」と山崎合戦を真似て〇〇君ときり結び、わざと負けて、「繩はゆるせ、首切れ。」の台詞。或は大日様のおみくじを有難がる信心深さ。木の実、どち遊び。菊毛氈きくもつくり。笛太鼓の素養から淨瑠璃に至るジャンルの多様さ。空箱に握り飯をつめ、庭の築山をぐるぐるまわり歩いたあげく、石灯籠の前で拍手をうって、お伊勢詣りの趣向などとイマジネーションも豊か。この伯母さんの親身の薫育によって、至高の芸術魂を持ち、正義感強く、繊細な暖かみもある〇〇君の人間が形成されているのです。

子どもたちの生活をマンネリ化させず、楽しみを待つ心を味わせ、好奇心で物事に対するようにしたいと強く希いながら、私はこの伯母さんとは比較にならず、自分の浅学菲才を如何にせんと嘆きがつるばかりでしたが。

寺田寅彦はその随筆に

「水素と酸素の混合物は常温常在では殆ど全く化合しないと云ってよい。然るに白金か、パラディウムの極めて微細な粉末状になったものを、この混合瓦斯中に入れると、それが媒介となって接触作用によって、酸素と水素が化合した水を生ずる。触媒は何も白金のよいうな貴金属とは限らない。ニッケルの粉が使われることもあり、場合によってガラスや炭の粉や土壌のようなものでも触媒の用をつとめる。」

私にだって触媒としてのガラスや炭の粉ぐらいの役目はできる。

辛いなことに、当時の家政大のキャンパスは自然が豊かでした。五百本を数える樅・樫の大樹。秋にはどんぐりや椎の実ひろいをし、枯枝を集めて七厘で火をおこし椎の実を煎って、皆でたべる格別な美味。キャンパスは枳殻垣をめぐらしているのです、その葉に巣くう青虫を飼育し、何回となく黄あばはに羽化する瞬間を息をつめて見詰め、蛙の卵が育つ浅い池は冬季は氷がはりつめて、子どもたちは氷とりに夢中になれる。よもぎを摘んで草団子をつくったり、落葉を集めて焚火をし、中に薯を埋めて焼けるのを待つ期待感を味わい、あり余るハコベは十姉妹の餌に。用務員が蟻蛙を見つけてくれたり、この自然環境は東京一だと自負したものでした。

園舎外というだけで子どもたちも教師も解放感を覚える園外保育を多くしました。早朝の明治神宮。玉砂利をふむ音にさえ神祕の気配を感じ、常夜燈が一つずつ消されてゆく情景。火焰太鼓の合図に神官が揃って礼拝後、まめまめしい掃除ぶりに好奇の目を輝かせた夕方の内苑。冬には神宮の森を晦としてゐる鳥が鳴き交しながら群れをなして帰ってきて、三十分もたつと枝々に吊し柿のような格好になって静まりかえります。ゴルフ場にならない以前の秋ヶ瀬に、「雨蛙が沢山いる。」と教えられて雨蛙とりに。素早く逃げる雨蛙を追っかけ歓声をあげて喜びました。野川へザリガニとりにも行きました。高麗のキンチャク田へれんげを摘みに行き、田螺を見つけて持ち帰り水槽に入れておいたら、「粒々

ができた。」と騒ぐので、見ると貝に小さい粒々が数個附着しているのです。田螺は胎生

なので、「これ赤ちゃんよ。」と教えたら大変興味を持ちました。

葉山の芝崎海岸まで遠出もしました。都立両国高校の好意で、新座市にある同校の運動場へ毎年虫捕りに。農薬を使用していないので、草丈は膝を没するほど伸びていて、その中で虫と一緒に跳びはねたり、果ては鬼ごっこになったりして、楽しい冒険をしているようです。晴海埠頭で、停泊中の捕鯨船や商船大学の練習船に乗せてもらった喜びもあって、学校以外の方々の方々の幼い者への温かい配慮に感激したのも園外保育のおかげでした。又、子どもたちの敏感でゆたかな感性を改めて識ることができました。

年長組になってから、既成の紙芝居はやめて、私が感銘した絵本を読みかかせました。冒頭に記したペンギンの話もその一つで、省略したり、理解し難いところは私の言葉で補いはしましたが、なるべく原文に忠実にしました。ケストナーの動物会議は、地球上の動物たちが、会議に集合するのに、どんな方法で会場にかけつけたかを中心に、問答しながら読みました。アンデルセンの絵のない絵本。世界の民話集。谷川俊太郎の詩など。

幻灯機を利用して、色セロハンを駆使しての影絵作りは、時間を忘れるほど没頭しました。(・はなをくんくん。・ぐりとぐら。・蛙の家さかし。・小さいうち。・のろまなローラー。・十一匹の猫。・園外保育で体験したことなどが好材料になり、子どもの手になったと思えぬほど美しい映像になりました)

五月のある午後。母親たちが連れ立って幼稚園にあらわれました。

「今日は小学校の参観でした。子どもたちの絵が貼り出されていて、大抵は漫画の模倣だったり、類型的な絵の中でこの幼稚園の卒業生のは、それ／＼個性的で、名前を確かめなくても、すぐ判りました。」

このことを先生に報告したくて。」

子どもの絵に関して、私は木霊の峰の麓にたどりついたような安堵感を覚えました。

子どもたちが、心が高まった時、又は友達同志で楽しく話し合いながら描いた絵はのびやかで、その子の息吹きが感じられます。

津守先生は、描画を心理的発達の立場から研究の蓄積を講義され、子どもの心奥の深さを微妙なニュアンスを教えていただきました。

最近、世界児童画展が開催され、その批評の一つに「日本のあるものは、技術はすぐれているが、イメージーションに乏しい。」と。

三十年近い昔に、私が耳にしたのと同じ言葉を聞きました。

風もないのに、絶え間なくハラハラと散る桜を私は長い間ぼんやりと見上げていました。

引用した本、

・ 幼児の描画指導（レニングラードの幼稚園の実践記録）

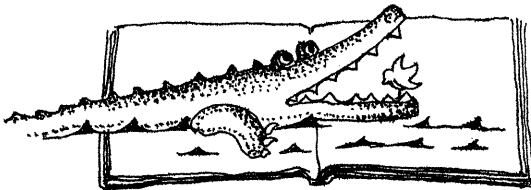
- ・中勘助（銀の匙）
- ・加藤周一（羊の歌）
- ・倉橋惣三（園丁雑感）
- ・寺田寅彦（触媒）

△註▽

思うままに園外保育ができたのは、園児数が少ないので、観光バスを使用せず、国電・地下鉄・路線バスを気軽に使用した為。（現在のようなきびしい交通事情でなく）山下園長の先生が、実践に関して何の干渉もされなかった。

——完——

（元東京家政大学附属幼稚園）





# 昔話の一考察

## —女性の心の内的成長について（下）—

小野 瑞江

前回は女性の心の内的成長について、昔話「鶴女房」と「天人女房」に語られた「献身」「耐えること」の意味を考察した。今回は残るもう一つの特性「積極的受動」について、「炭焼長者」の昔話で考察する。

### 3 受身の積極性…「炭焼長者」

△あらずじ▽塩一升の位的女と竹一本の位の男が、親の定めた約束通り夫婦になる。あらまぢの日（大麦の収穫祭、男は女房が差出す麦飯を「新麦の飯を食えというか」と怒ってお膳ごとけとばす。女房は覚悟を定め、親からもらった家倉のすべてを男に残し、膳と椀だけもらって家を出る。門を出て女は、倉の神様が告げる心も姿も美しい働きの炭焼五郎の存在を知る。女は五郎を訪ね、自ら嫁にもらって欲しいと頼む。五郎ははじめ断わるが、女に是非にと頼まれ、承諾する。翌日から女房は、夫と炭焼かまどを見てまわって黄金を発見し、たちまち長者になる。

一方竹一本の位のもの夫は、だんだん貧乏になり、竹細工物を売って歩いて、ある日炭焼五郎の家へやってきた。かつての女房はまだ男の顔を知っていたので、男の品物を高く買ってやる。二度目に訪れた時、男は自分の前の女房であることを知り、舌をかみきって死ぬ。——鹿児島県大島郡

女ははじめ、父親同士の定めた約束に従い男と結婚している。定められた運命に対して当然のごとく受身で従順な態度である。結婚後も塩一升の位の女房が、竹一本の位の男につかえるのに、決して傲慢ではない。あらまぢの祭日、女は「一俵の麦を一年になるまで、一斗の麦は一升になるまで搗いて炊いた飯です。今日はあらまぢの祝いですから、どうかこれを食べて下さい」と差し出す。女が竹一本の位の夫を盛りたて、一生懸命つくした様子からうかがえる。それだけでなく、舅、姑に苛められたと語られる類話もあり（福島県南会津郡）、嫁として舅、姑にもつかえねばならなかったであろう。ここまでの女は、1、2節の女たちに共通する、献身し、耐え、受入れるという行為を通して、母性の発展という内

的な仕事をやり遂げている。

一方男はどのように語られているだろうか。夫は怠け者で神信心なぞしないという（石川県小松市）。その上畜で下女下男の使いがあらひ（山梨県西八代郡）。それゆゑ夫を盛り立てようとする女房の配慮も、夫には弟子どもにまでな不自由な自由ないよう銭金を与える困り者（岩手県遠野市）、としかうつらない。遂に夫は、使いが荒いこの女房をおいてはとても富貴にはなれぬ、と家を追い出すのである。この種の類話と、冒頭の昔話のように、自ら夫のもとを去ったと語られるものとは、およそ同数に及ぶ。男に追い出されるにしろ、自ら出ていくにしろ、女は自分の行為のいいわけもしなければ、その正しさを主張して男と敵対することもしない。黙って出ていくのである。女性が猛々しい男性に直接的に対することには、好ましいあり方ではないようである。プシケが葦によって諭されたのもまさにそのことであった。つまりアフロディーテーがプシケーに課した仕事は、「輝く黄金の羊」の毛を一房集めることであつた。すべてを焼き

つくす、男性の破壊的な力のシンボルである太陽の雄羊から毛を一房集めるなど、プシケーにはとてもできそうもない。仕事の困難さを悲嘆して身投げしようとしていたプシケーは、河の中の葦によって助けられる。「お待ちになって。がまんしなさい。そのうちにことがわかりましょう。時がたてばいい知恵が湧いてくるでしょう。

日は常に高いとは限りません。そして男性性もまたつねに強烈であるとは限りません。ひとはその力に逆らってはならないのです」と葦はささやいた。このようにして男性と女性がお互いにすさまじい敵意を持って向かい合う事態は避けられるのである。

さて男のもとを去った女はどうするか。女は既に1節（「鶴女房」）並びに2節（「天人女房」）で、女性の課題（献身並びに耐えること）をやりとげ、男性機能の統合をなしつつあった。それゆえ極めてしなやかに強くなりつつある女は、援助を求めて父母のもとへ戻ったりはしない。女が男との真に実り豊かな関係をもつようになるには、本能の声を聞けばよい。

女は倉に寝て倉の神様の声を聞き、炭焼五郎の存在を知る。炭焼五郎といえば「世の中のナララン者（貧困者）」ではあるが、「心も美しく、姿も美しい働き者」であるという。その炭焼男は、「見ろう様もない簾戸の家」に住む貧乏者であった。ところが訪れた女は少しも驚かない。それは女が、貧乏な男の外見にとらわれず、その本質を見抜く力を持っていたからであるともいえる。女は妻にして欲しいと男に頼む。男の方が立派な姿の女に驚いて「フトフト震え」という。男は「あなたはこの世の中にふたりとないりっぱな女である。私などのような者の妻にはとてもふさわしからん」と断わる。外見において男と女は大変な身分の相違があったようである。女は繰り返して「私の望みだからせむ」と頼み、とうとう承諾させてしまう。

女房になった翌日から女は非常に能動的となる。男の炭かまどを見て廻り、たくさんの黄金を発見する。その黄金は男自身に気づかれていなかったものである。それどころか価値のないものとして見捨てられてさえいたも

のであった。ここで示した女の能動性は、どこまでも相手に添い、相手の能力を引き出すという意味で、受身の積極性ともいえるものであろう。玉谷直美は女性の自己実現のあり方について、「女性は直接的な自我の要求に一度は目を閉じ、つねに相手のことを考えながら行動するという自我否定を媒介とした自我の肯定の強さが必要だ」と述べる。まさに炭焼女房のあり方もそのようなものであった。そのことが二人の結婚をして黄金で象徴される幸福へと導いたといえよう。

昔話はここで終わらず、女が以前に別れた夫について語られる。本節の冒頭で掲げた昔話は、貧乏になった別れた夫が、自分が以前別れた女房に助けられたことを知って自殺する。ところが岩手県遠野市の類話では、結果が異なる。乞食になって廻り廻ってきた前夫に女は米を三升やり、なくなったら又来るように、と告げて帰す。男が次に再度女を訪れた時、女は夫に話して家の下男として使うことにする。乞食となった前夫は、以前別れた女房とは知らず、喜んで炭焼長者のもとで一生を

送ったという。河合隼雄は遠野市の類話の結末について次のように説明している。女性の意識は男性のそのように、悪しきものを切断し排除することよりは、取り入れることに特徴がある、従って女は一度切断し、排除した関係を何らかの方法で修復しようとしている。それは弱いものや悪をさえ受入れることによって、たえず全体性を志向しようとするものであろう、と。母性はもともと「包含する」という機能において特に優れていたのである。

さて「炭焼長者」の昔話を、(一人の)女性の心の出来事として分析することもできる。つまり女は、はじめ竹一本の位の男(男性機能)の低い部分を受入れることができなかった。しかし女は男(男性機能)との直接的な対峙を避け、本能の声を聞く(自然に耳を傾ける)ことによって、男(男性機能)の別の側面(黄金の部分)を発見し、出会うことができたともいえる。しかもその後、竹一本の位のもの男を受入れるという類話が存在している。それは、男(男性機能)の黄金の一部

分だけでなく、低い部分も含めてまるごと受容できたということであろうか、しかもまわり道をしてはじめてそれが可能になるのである。

このように解釈した時、まさに女性性の凄さに驚かされる。女性性が持つ、本来すべてを包含する絶大なエネルギーが、秩序と方向性を伴って全体性を志向した姿、それが炭焼長者の女房にあらわされている。女房は、女性性の発展と同時に男性機能の統合をも果たし、自由にはばたく女性へと心の成長をとげ、そのしなやかな姿をわれわれの前にあらわしてくれたのである。

#### 4 結論

結婚は個性化（自己実現）に至る一つの道程である。何故ならグッゲンビュール・クレイグによると、個性化は男性対女性という対極性の中でより多く実現されるものであるという。本稿は昔話の中で、結婚における女性の個性化がどのように語られているか、その心の内的成長過程に焦点をあてて考察しようとしたものである。

女性、が心の成長、それも精神性の高い成長を遂げるには、母性の発展と男性機能の統合が必要とされる。河合隼雄によると、両者は一見敵対する如く見えながら、実は相補的な関係を形づくるものであるという。つまり男性機能に鍛えられない母性はあまりにも泥くさく、逆に母性によって支えられない男性機能は、あまりにも冷たすぎるのである。ここにいる母性（母性原理）とは、「包含する」機能を中核にして、肯定的な面においては生み育てるものであり、否定的には呑み込み、しがみつき、死に到らしめる面がある。これに対して男性機能は（父性原理）、「切断」する機能にその特性がある。それはすべてのものを切断し、分析分割するものである。又主体と客体、善と悪、上と下などに分類し、母性がすべての子どもを平等に扱うのに対して、子どもをその能力や個性に依りて類別する。男性機能はこのように強いものをつくりあげてゆく建設的な面と、逆に切断の力が強すぎて破壊に到る両面をそなえている。

結婚において女性の個性化、あるいは内的な心の成長



が実現していくには、とくに上述の母性機能と男性機能の両者をどのように統合していくかが重要となる。しかも女性のばあいその統合の基本に流れるものは、すべてのものの「受容」という行為であるように思われる。ノイマンによれば、「女性が竜と戦っている魅惑的な姿を

われわれは想像することができない。竜をやっつける女性のやり方というのは、竜を受入れることである」という。竜をさええ受入れる程の器が、女性の個性化の過程で明確になってくるということであろうか。

さて、「鶴女房」と「天人女房」の昔話において、献身する女、耐える女としてすべてを受入れることによって、まず母性の開発と発展がはかられた。ところが既述した如く、母性が何もかも受け入れ、容れ込み、その内容物に秩序も方向性もない時、女性のエネルギーは絶大でたくましいが、昇華されることなく、心の中において混沌の状況にある。この混沌の状況にあるエネルギーが、「天人女房」において秩序と方向性を持ち、男性機能統合の第一段階の仕事がなれば成し遂げられた。しかし母性により確かな秩序と方向性が与えられるには、「炭焼長者」まで待たねばならない。

具体的には母性の発展と男性機能の統合が、日本の昔話においてどのように語られているか、本稿の分析考察の結果を要約したい。

(1) 「鶴女房」においては、男に献身的につくす女が語

られる。女は自ら望んで戸棚の中へ入り、食事もとらずに機織りに精出す。機織りに三年もかかったと語られる昔話もある。しかも女は自分の羽毛を抜いて、文字通り身を削る思いで男に尽くすべく働く。一方欲深くなった男は、女が尽くせば尽くすほど女の思いからは遠い存在になるばかりであった。男は女との固い約束を破って、女の真の姿である裸の鶴を見てしまう。はからずもお互いの真の姿を見たために、女は死に至る程の衝撃を抱いたであろう。とうとう女は男性機能を位置づけることができず、傷ついたらまゝいったんは男のもとを立ち去らねばならなかった。

(2) 傷ついて男のもとを去った女は、「天人女房」において天女として、再び男の前にその姿を現した。女は羽衣である飛び衣を男にとりあげられ、やむなく男と結婚し、子どももできた、七年の歳月、女は一度手にした自我の動きをとめて、家庭の中で耐える女となる。ところが丁度七年目、飛び衣をみつけ、女は男のもとから飛び

立ってしまう。

「鶴女房」と「天人女房」の相違は、これ以降の展開にある。つまり前者では女の献身と努力に対応する男の変容がなく、女は黙って男のもとを立ち去った。ところが後者では男が忍耐と努力の末、立ち去った女を追って天を訪れ、変容の道を歩む。また「天人女房」で語られる男を女性の心の中の男性像と読み解くと、山を伐り拓き、種を蒔きとり入れる仕事は、まさに女性にとっての男性機能統合過程の仕事ともとらえられる。

さて「天人女房」では、男の変容または女の男性機能統合のための仕事になされたにも拘らず、最後のところまで失敗してしまふ。真の変容と統合が可能になるのは、「炭焼長者」まで待たねばならなかった。

(3) 「炭焼長者」では最初女は、父親の定めた結婚に従順であった。又女は結婚後も位の違う男によくつかえ、男の我儘にもよく耐えたであろう。ここまでの女は「鶴女房」や「天人女房」に共通する、運命を受入れ、相手に尽くして耐えるという、運命に極めて受動的な姿で語

られる。ところが男の理不尽なわがまゝが続いた時、女は決然と男のもとを去る。ここで女は極めて能動的な、まさに「意志する女性」へと変貌していく。しかも男と別れた後の女の活躍にはめざましいものがある。炭焼五郎という男の存在を知り、訪ねて結婚を申し込み、男の家の炭かまどにあったたくさんの黄金をも発見する。それのみにとどまらず、最後には女は以前に切斷・排除した前夫をも自分の圈内へとり入れ位置づけてしまう。これはまさにユングのいう全体性への志向ともいえるものであろう。

さて離婚、家出以降の女の能動性は、男性のそれとは異なり極めて女性的、母性的ともいえる特徴を持つ。つまり自我を前面に出して主張する能動性ではなく、相手の潜在能力を発見してひき出すという意味での受身のそれである。相手の個性化（自己実現）の援助を通して、結果として自己の個性化を達成するあり方でもある。このように女性の個性化は、必ず「受容」を基本とするため、現象的には受身の形をとる。しかしこの女性の姿

は、決して単なる字義通りの受身にとどまらず、受動も能動も含み、ある時には極めて意志的でさえあるといえよう。

「炭焼長者」の女房に到つてようやく母性（女性性）の発展と同時に男性機能の統合も可能となったわけである。炭焼五郎の女房は、「受容」の姿勢をどこまでも持ち続けながら、能動も受動も必要に応じて自己の中に位置づけられ、かつそれにとらわれない、しなやかな女性へと心の成長を遂げた姿をあらわしたものであろう。筆者はここでの女の姿こそ極めて女性的な心の成長を遂げた、女性の個性化（自己実現）への姿ととらえるものがある。

#### IV おわりに

筆者が本稿で試みたのは、「結婚」を通して実現される女性の心の内的成長過程を明らかにすることであった。その主題化の動機については序論で述べた通りであるが、さらにいま一つ、本稿が筆者自身にとつてもつ



体的意味についても言及しておきたい。そのことは、人間研究が単に知的・客観的・科学的解明にとどまらず、同時に研究主体自身によって主体的・共感的に生きられる側面からの接近が重要な意味を持つからである。特にユングの分析心理学では後者の側面が大切にされる。

では本稿のばあい、「結婚」が主題化されたことの主体的意味は何か。それは筆者自身がユングという人生の後半期（四〇歳前後）に立ち至り、その転換期に固有の内的・外的危機を迎えたことに起因している。

筆者はこの期、その内的・外的危機と向きあい、長い時間の経過を待ってはじめて、結果としてそれらを受容すること、又それが意味することを学ぶことができた。それは「結婚」における、まさに女性的なあり方を通してといえる。「受容」するということは、極めてあたりまえの平凡なことからでありながら、同時に極めて奥深い意味をもつものでもある。

いっぽうこのことは、一度「灯をかかげた女性」（自我確立の問題に目覚めた女性）にとつて、自ら死にゆく

程の苦しみを要求する。この苦しみは、グッゲンブルックレイグのいう「個性化に伴なう自己放棄的犠牲の要求」の故でもある。しかし個性化は、決して個人主義的、利己主義的ではありえないという。周囲の間を犠牲にして、ただひとりだけに都合の良い利己的な個性化などないといえよう。個性化はまわり道のようにあっても、自己をとりまくすべてが、「ともに救済に向かつて働く」ことの中にこそ実現される。

昔話が語る「結婚」における女性の内的な成長は、「鶴女房」から「天人女房」、さらには「炭焼女房」へのしなやかな成長。この自己放棄的犠牲を通過してはじめて獲得されたものでもあった。

—— 完 ——

（福山短期大学）

## おとす母とうたれる私

やまだようこ

### 1 しかる母

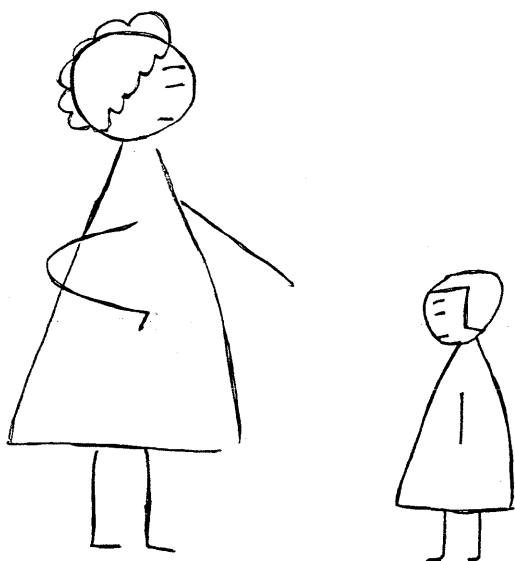
このごろは、甘口で柔らかいプリンのような母親や、「今日は何を食べたい？」と王様のごとき子どもにお伺いをたててハンバーグやカレーをつくる母親が氾濫している。大人も子どもも仲良くお子さまランチを食べて「ゲップ」を出している過保護で飽食の時代である。だから子どもを厳しくしかりつける母親の姿を思い描く人は、現代では少数派かもしれない。しかしまた一方では、子どもを支配下に入れて思いのままに統制し、モニスターのごとく君臨するママゴンも少なくない。

子どもをしかるには、母親の思いこみであれ何であれ、「どうしてもこうでなければならぬ」という母自身のポリシーと、強いエネルギーが必要である。それゆえしかる母のイメージには、良きにつけ悪しきにつけ、真剣味と迫力がある。今回は特に私の拙い解説よりも、絵そのものが直にわたしたちの情熱を揺さぶるすごさを味わっていただきたい。

またこれらは今までも述べてきたように、単に「母子関係」だけではなく、「父子関係」「師弟関係」「上司―部下関係」など、さまざまに読み変えることができ

る、人間関係のありようのひとつでもある。

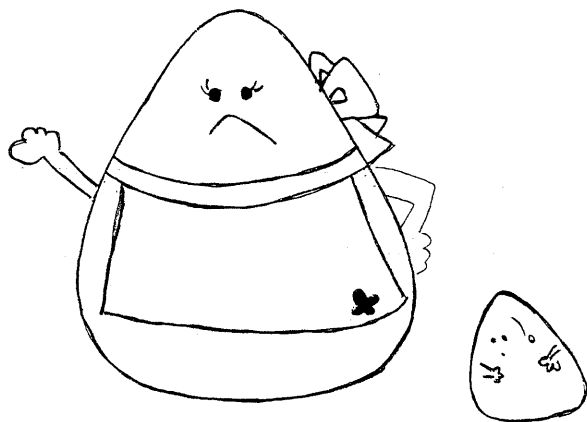
2 並んで立ち、手をあげる母



▲図1 並んで指図する母

母は何でもできる偉大な人であり、ほぼ母にいわれたとおりには私は行動していた。

図1と図2を見ていただきたい。2つの絵にはいくつかの共通点がある。母は怖い顔をして怒っているが、特に手のしぐさは特徴的である。一方の手は腰にあてら

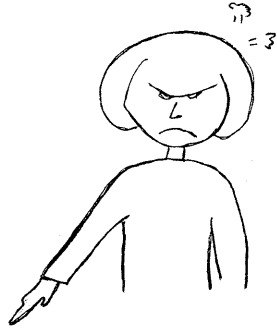


▲図2 並んで立ち こぶしを上げる母

今でもそうだが小さい頃はよくしかられ、体が小さいこともあって、よくたたかれた。この頃は、少しくずれたけれども、母は偉大だというイメージをもっていた。

れ、もう一方の手は子どもに向かって指図するかのよう  
 突き出されたり、握ったこぶしが突き上げられている。  
 このように威圧的なポーズで立っている母に対して、子  
 どもは、母親に向かって、頭や体を少したれて神妙な表情  
 をしている。

人間が、他の人を支配したり威圧しようとするとき、



▲図3 斜め上から指摘する母

小さいころと言ってもどのくらいの時かわからないが、  
 よくおこられていた。母はしつづけにきびしかった。

あるいは怒るときの姿勢やしぐさは、似通っているよう  
 である。だがこの場合には、説明文に両方とも「母は偉  
 大」と書かれているように、子どもは母の権威をそれな  
 りに認めており、両者のあいだには幾分ユーモラスな雰  
 囲気もある。



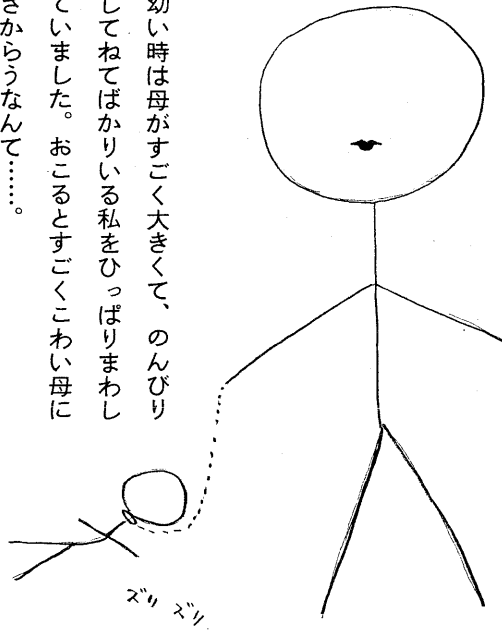
▲図4 斜め上からどなる母

いつもおこられて、手がとんできて泣いていた。

### 3 斜め上の、身体部分だけの母

図3、図4、図5を見ていただきたい。これらの絵では、先に見た絵と比べると、母親の姿はいちだと怖い

▲ 図5 口紅だけの母



幼い時は母がすごく大きくて、のんびりしてねてばかりいる私をひっぱりまわしていました。おこるとすごくこわい母にさからうなんて……。

鏡に向かって化粧をしているところをのぞくと、よくしかられたものです。

ようにみえる。先の母親は、子どもと同じ地平線上に立っていたのに対し、これらの絵では母親は斜め上の位置に移行していて、子どもとの上下関係がさらに強調されている。

そして興味深いことに、母親はもはや子どもと同じような全身像としては描かれていない。母は身体下部が切れて宙に浮いていたり、口だけが強調されている。また子どもも、ひざまずいて謝ってたり、泣いていたり、鎖につながれて引きずられていたり、母にさからうことができない、あわれな姿で描かれている。

### 4 真上から見下ろす、圧倒的に大きい母

図6、図7を見ていただきたい。これらの絵では、母親がさらに完全に真上に移行し、子どもを上から見下ろす、圧倒的に大きく威圧する姿として描かれている。口だけの母も怖い、真上に立つ母から生まれ監視されるのは、もっと怖いかもしれない。そして母の顔は正面向きで大きく個性的であるのに対し、子どもは後ろ向き

いつでも母は私を上から見下ろし、絶対的な存在でありました。神様よりえらく、よく働く母は、自慢の対象にこそならないけど、(派手さが無いものですから)尊敬するべき人だと思ってました。



▲図6 真上から見下ろす母

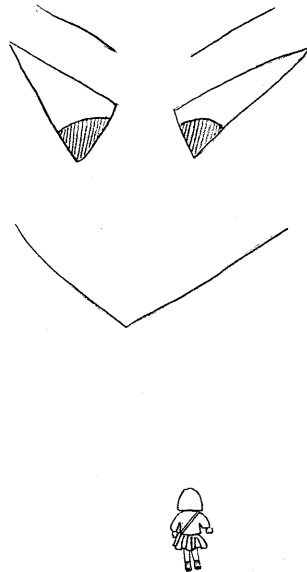
で小さく独自の表情や感情さえ無いようにみえる。

5 真上から打つ、かなづちの母

図8、図9、図10を見ていただきたい。これらの絵では、母親はもはや人間の部分でさえなく、私を打ちつけるかなづち、私の上のしかかるつけもの石のような圧

いつも怒られてばかりいて、常に監視されていた。

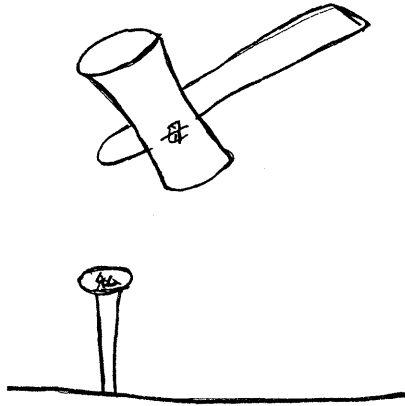
▲図7 真上から監視する母



力、円である私を切り裂く鋭い三角形の教育ママゴンなど、非人間的な物体に変身している。

これらの構図は、上下関係を逆転させれば、親ガメの上の子ガメなど「ささえる母」の絵にもなる。位置を逆転するだけで、その関係は天と地ほどにちがってしまう。

◀ 図8 釘(私)を打つ  
かなづち(母)



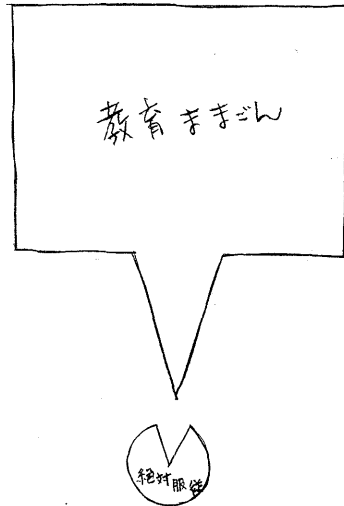
子どもにとって打たれることは辛く悲しい。ただし母を機能としてみれば、支える母は「良い母」だが、打つ母は「悪い母」だと簡単にいうことはできない。「出る杭は打たれる」「鉄は熱いうちに打て」「嫁御と妻は最初

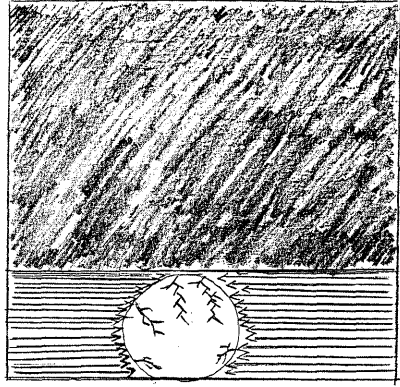


▲ 図9 私の上の石(母)

に踏め」「可愛い子は打って育てろ」「可愛い子には灸をすえ、憎い子には砂糖をやれ」などのことわざにみられるように、打つことも、それなりの教育的機能をもつだろう。

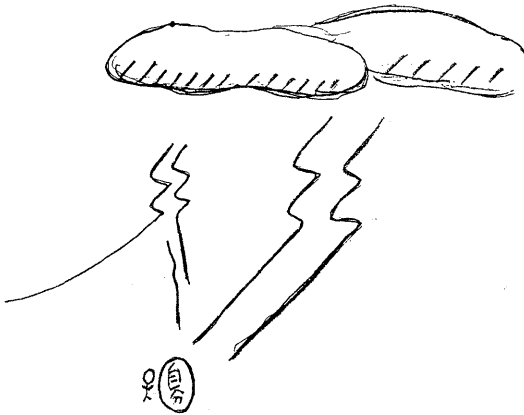
◀ 図10 教育ままごん





▲図11 私を押しつぶす暗闇

母が私にとっておそろしい存在、かばってくれる存在と  
いうことを表すために斜線にしました。円にひびがある  
のは不安感です。矢印は孤独感です。  
私にとって幼い頃の母は保護者であり、又、精神的な意  
味での攻撃者（叱られてばかりで、ほめられた記憶がほ  
んどない）であり、畏怖の存在でありました。私はい  
つもびくびくし、精神的な安定感はなかったのです。  
母の顔は怒り顔しかおぼえていません。



▲図12 おちる雷

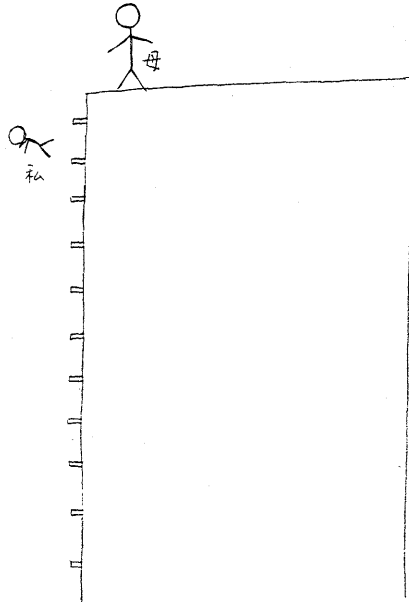
音を出して、とにかく恐ろしいという  
こわい存在。

## 6 真上からおちる、雷の母

図11、図12を見ていただきたい。これらの絵では、母  
親は物体としての明確な姿や意志を読みとることができ  
ない、怖い自然現象として描かれている。雷は、いつど  
こへ落ちるか予測をたてるのが困難なので、恐怖や不  
安をもたらす。また、びくびくしてひび割れたような自



◀ 図13 おとす母



幼いときの母は、私を自分の理想通りに成長するように育てたかったようであり、母の理想は、どんな苦勞にも耐え、常に努力することを忘れない人間である。しかし母の敷いたレールの上を常に走る子供も、母の理想の一つであった。

己像は、反抗してとび出て打たれるクギよりも、さらに悲惨である。

このように、母親の位置が私から離れて上部へ移行するほど、母は人間の姿から離れていくようである。そして圧倒的な力関係で、子どもの存在を脅かしている。

## 7 おとす母

図13も、たとえようもなく怖い絵である。この絵では、上下関係の強調は、母が上部へ移動するというやり方ではなく、子どもが下部へつき落とされるというやり方で達成されている。虎は我が子を谷底へつき落とすとして、はいあがってきた強い子だけを育てるなどといわれているが、信頼していた母親から奈落へつき落とされる子どもは、どんな気持がするのだろうか。

(愛知淑徳大学)



は、さっそくに自分も網とかごを持ってきた。

蛭はここ山口市の観光名物の一つになっていて、毎年六月、一の坂川で「蛭まつり」がある。別に何の企画もなく、ただ川沿いを車の通行止めにし、ゆっくり散歩できるようにするだけのものであるが、かなりの人出がある。蛭の数より人間の数の方が多いくらいで子どもづれには向かない。蛭をつかまえたがるからである。この場合はひんしゆくものになる。蛭はなにもそこだけでなく、郊外のあちこちの川にいます。それでも河川改修が進むにつれて、年々減ってくるので、学校をあげて、人工飼育に取り組んでいるところもある。蛭が飛び立つ期間は短いので、私は毎年子どもを誘って、近くの川でちゃんと生きているかどうかを確かめたい。子どもたちもいったんは夢中で捕まえるけれど、年々少なくなる、という大人のつぶやきを聞いているからか、庭に放して、つかの間の所有感を味わうだけである。蛭を手のひらに乗せて、いとおしむように飛び立つのを待つ。

今、私の娘たちは六年生と四年生、日常生活での世話に相当する部分がいぶん少なくなってきた。お金を出すこと、行動予定を確認すること、食事をしながらあれこれ報告を聞くことが主になってきた。あとは、家事の共有、これは食の部分では何とかやれているが、衣の部分はまだまだで、「お母さん、ブラウスにアイロンがかかってない」などと言われ、ブツブツと不平を言いつつしてやっている。そうそう、もう一つ、宿題をなるべくあとにやろうと考えている人がいるので、それを当日にやるようにせかすということをやっている。これが一番いやなことである。いずれ、これからも手を引く予定である。いやもしかしら反対に、これは大問題に発展するかも知れない。そうならないことを切に祈っている。

というわけで、ただいま、子どもからの撤退をはかっている最中であるが、別の出会いもしていきたい。幸いにして、私にはおやお劇場という場がある。これは今ごろ

になって、特にそのありがたさが増してきたように思う。一つには、親子で共有の文化があるということ。これは幼児時代は、家で本を読んでやったり、世話をしているうちに知らず知らずのうちに体験を共有しているわけで、自分の子どもものの感じ方や考え方に触れていたことになるので、親子で舞台を見に行ってもそれが少し増えるくらいのことだった。しかし、小学生になると、読み聞かせもいつの間にか卒業して、自分で読み始める。私にもすすめられることがあるので、そういう時はのがさないけれど、たいていは子ども一人のこととなる。考えることや体験が複雑になり難しくなるのに、親とは離れていく。そんな時に、いっしょに舞台を見に行くと、その後であれこれおしゃべりするのとはとても楽しい。いつだったか、私が体調をくずしたので父親と三人で「おっちょこちょ医」という風刺劇を見に行くと、「お母さんにも見せたかったー」と楽しそうに報告してくれたときは、くやしかった。高学年用の例会もあって、性の問題や家族の問題も、真摯に取り上げている作

品に出会うと子どもといっしょに同じ問題に向いているという感じになる。都会にいれば、こんなことはいつでもできることだけれど、私の体験から言うと、都会は案外「文化砂漠」みたいなどころがあるように思う。たくさんありすぎて、私はあまりいいものに出会えなかった。

このように受け取る文化も大事だけれど、なによりも創る文化の方が楽しみである。このおやこ劇場も、見るだけでいいという人や、創るなんてめんどろうだという人もいる。それにおけいこごとや学校の下請けで忙しくて、子どもが大きくなったら離れていくこともある。だけれど、一度でも創ることを体験したらやめられなくなる。

この一月、私たち「くまのプーさん」サークルは「文化まつり」で、劇「おしゃべりなたまごやき」を上演した。大人一三人、子ども二五人計三八人の大所帯で、しかも子どもは赤ちゃんから中一までまんべんなくそろっ

ている。この子どもたちが「劇」をやるなんて、とても成算はなかったのだけれど、とにかくこわいもの知らずで、持ちかけてみた。あれやこれやの相談、打ち合わせを重ねて、練習も始まった。

一月二日（土）午後、初めて、劇に出る人ほぼ全員が集まった。自己紹介を少し改まってした。それが不思議なことに、小さい子ではなく、大きい子がふざけたりはぐらかしたりするのである。それをその親が叱ったり注意すると、かえってむくれてしまうのである。私はそれを見て、親は自分の子にちゃんとやってもらいたいとあせるのだ、と気づいた。子どもは子どもで、親の前でフォーマルなことはやりにくいのだと思った。私の子どもがいまいち、私の注意をはねかえすのも、わかるような気がした。その意味で、親から離れつつある子どもたちの自我が育っているし、親としてはお互いに補いあうしかないと思った。

全員そろっただけでも、十分感激だったのだが、練習を開始すると、これがまたたいへん。仲間は増えだし、

会場（公民館）は広いので、子どもらの動き回ることを通しげいこをするのだが、とりあえず自分の出番でないとどこかへ、消えてしまうのである。出番になって呼んでもいないことがざらにある。ほんとに、大きなメダカの群れを相手にしているようだった。とにかく一度通すのに、20分のはずが1時間かかったのである。私とMさんはぐったりしてしまった。あと、練習は来週の土、日しかない。その日曜の午後が本番である。前途多難である。

さて土曜日、今日は衣装も持ってきているので、子どもたちは少し張り切っている。その子たちをつれて、当日の会場（県立児童センター）へ行く。ステージの感覚をつかんでもらうために特別に借りたのだ。持ち時間は三〇分。持っていた衣装をつける暇もなく、立ちげいこをする。思ったより声が響かない。何とか流して、早々にもとの練習場へもどる。舞台のイメージが出てきたので、少し動きがぎめやすくなった。とはいえ、相変わらず、スイスイと動き回る人たちである。王様の散歩

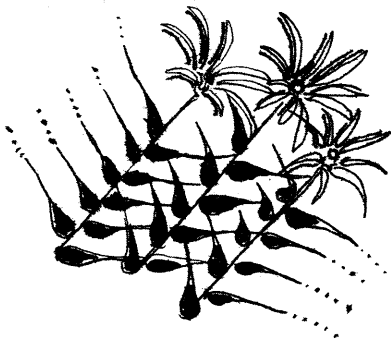
の第二場がいまいちタイミングが合わず、何度か、やり直す。その間出番のない子は、相変わらず遊び回っている。五、六年の男子は鉄砲で遊び、女の子たちは黒板に何か書いたり、思わず幼児ではないかと思ってしまう光景である。そんなものにはもう慣れたけど、今日初めてこのようすを見たお母さんは、「なんとかならんのか」と言ってくる。しかし、この時点では、私には少したが一人一人の子どもが見えてきた。まず、Mがこちらに合わせ始めたこと、まかせようと考えたのが通じたみたいだ。始めるよと横を見ると、ちゃんとその場にいる。中学生が色々なアイデアを持ってきはじめてきたこと。たまごの声をどうするか、ピアノでバックに「イエスタデイ」を弾きたいとか、動きについての注文とかが出てきたのだ。弟の代わりにぼくが兵隊をやるとか、ピストルをつかってもいいかなど、単発的に私のところに言うてくる。全体としてのまとまりは感じられないけれど、一人一人とはつながってきたという実感があつた。しかし、舞台の装置も不十分なまま、時間がきて解散した。

さて、いよいよ当日。上演は午後二時頃の予定。朝から公民館に集まる。用意した衣装を出して身につける。一挙に劇の気分が盛り上がる。「ハムレット」の王様に驚き、コックさんの本格的なこと、背の高いぼうしはNさんが夜中の二時まで頑張つて和紙で作りあげたものにわとりのお面をいくつも描いてくれたお父さん、大きな鶏小屋には、ネットもかかつてそれらしくなってきた。王様の散歩の場面で、小道具の草を反対方向に動かそうというグッドアイデアも出て、忙しくなった。そしてうれしいことに、昨日来ないと言っていたあのTu君も来たのだ。「見て、見てーYの顔！」女の子達の声に振り向けば、お医者さんのYくんがつけひげをしている。おたがいの姿を見あつて、ひとしきりさわいだあ、練習に入る。子どもは総出演なので、大人たちは、大道具などにかりだされる。一回通し、ひとやすみしたあと、「これで最後だからねー。もう、何にも言わないよー。自分たちでやってみてごらん」と手を引く。だいたい順序は頭に入ったようだ。セリフを時々間違える

が、意味を間違えなければ少々のことはいいとしてある。音楽に合わせることもいい。時間は約二〇分の中に納まった。さすがに今日は遊び歩く人がいない。幼児が、大きい子の様子を見ようとして、舞台ににじり寄ってくる程度である。あとは照れとのたたかいである。どうしても大きい子の中で、恥ずかしがってしまう子がいる。その恥ずかしさが、声に出してしまうのだ。ラストシーンを確認して終わりにする。たった一つ、最後まで決まらなかったものがある。それは、この劇のハイライトというべき、「たまごの声」である。テープに吹き込

んで早回しをしてみたりしたのだけれど、ピタッと止まらない。とうとう、Tちゃんが声色でやるということだけにした。ぶっつけ本番である。会場へ行く。実は朝から「文化祭り」は始まっていたのだ。余裕のない私達は昼から駆けつけである。二十四のサークルが劇やオペレッタ、合奏などをやる。

ブザーがなって、いよいよ本番開始。ピアノが開幕の音楽を演奏し、スタート、照明室で緊張している私の耳に、次々とセリフがピシッピシッとはいってくる。ナレーターがセリフを間違えたが、コールは動揺しなかつ



た。さあ、問題の「たまごの声」。どうなることかと見守っていたら、まあ、素晴らしい声音で、マイクを上手に使い、会場には誰が言っているのかわからない。タイミングも決まり、思わず会場が感嘆の声につつまれた。そしてそのまま劇は進行し、遠くから見ている私は、「すごい！練習の一〇倍はうまくやった」と、驚いたのであった。照明室の人が「よく練習しましたね！」と、いってくれた。このあと、なんと、「アカデミー賞」受賞というおまけまでついでしまった。

そして四月には「ありんこ市」。子どもたちが手作りのおもちやや、食べ物売り買いをする。今年は何度目の参加である。初めての時は、親たちも子どもたちもおおずおずとしていたが、ブーメランをはじめ、用意したものが飛ぶように売れたことから、すっかり、この企画が気に入ってしまった。翌年、「吹き玉」が「今年のヒット商品」に選ばれたことから、ますます自信を深め、これだけは、自意識過剰さみに意欲的に取り組むのであ

る。子どもたちも成長するにつれ、かわり方がどんどん積極的になってきた。

初めの年、子どもたちは親たちの後ろで、見ているだけであった。むらがつて買いに来るお客に圧倒されていた。そして、もっぱらよそのお店に買いに行くことを楽しんでいった。次の年、子どもたちは、商品づくりを手伝った。当日、正札を書いた。はじめは大人がお客に対応していたがおわる頃になってふと見ると、売り手は子どもたちになっていた。売れゆきが悪いものは「行商」に出ていった。そして三度目、子どもたちは商品のアイデアを持ってきた。商品づくりを分担しはじめた。ポスターも描いた。「つりぼり」が大人気で担当の男の子たちは、お昼ごはんの時間もとれないくらいであったが、ねばり強くお客の相手をしていた。

そして今年。子どもたちは、どんな成長を見せてくれるのか大人たちは楽しみにしていた。

ありんこ市で弓矢と竹鉄砲を売りました。そして弓矢



はすぐ売れ、竹鉄砲は売って歩きました。それに、ありんこ市ははじめての経験だったので、とても楽しかったです。

(四年M)

ほんがあまりうれませんでした。らいねんもまたうります。

(四才H)

一学期に一回ずつやりたい。おこづかいを上げて、品物のねだんも上げたい。売り場を広くしてもらいたい。みんなが買いやすくなるために。

(四年Y)

わたしは、ありんこいちでたのしかったのは、いちごジュースがのこらずうれた。そしてわたしはゆび人ぎょうのかみのけをてつだいました。

(二年K)

かごにクッキーや本を入れて売って回って、大きな声を出したので、のどがいたくなりました。お買物もできたり楽しかった。今度またやりたいなあ。

(四年F)

ゆび人形のしあげ四九コ、徹夜でした。生れて初めての経験でした。あつという間に売れて、カンゲキでした！

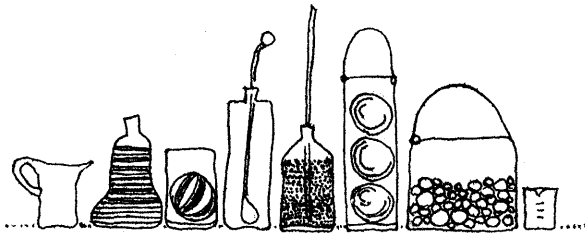
(六年N)

クッキーの型ぬきができてとてもたのしかった。また

やりたいです。

(五才I)

多くの子どもたちの中に自分の子もおいて見られること、そして、何よりも共に創り、お互いの成長を確かめあえるのがうれしい。



本誌に連載されていたお話が単行本になります。一冊は、すでに発売されていて、今月号で紹介されました、津守真先生の「保育の一日とその周辺」です。もう一冊は、一月号から五月号に連載されました「倉橋惣三保育法講義録」です。こちらは、近い内に発売される予定です。皆様も、どうぞご一読下さい。

今月から「倉橋惣三「保育法」講義録をよんで」というシリーズで、何人かの先生方に、いろいろな角度から書いていただくことになりました。新教育要領実施にむけて、この倉橋理論を今の保育にどう生かしていくか、更に考えていきたいと思います。

山田洋子先生の「母のイメージ」だんだんおそろしい母が登場してきました。でも、おもしろがったり、こわがったりしてばかりはいられません。私の中にも、このこわーい母の姿に似たものがある。

ります。子どもたちの「お母さんにおられるから……」しかたがないから……」という言葉が、ぐざりと私の胸にさざります。そういえば、一方的に命令口調で、子どもに指図しすぎたかしら、私の目もあんなにつり上がっていたかしら……

。気になりながらも、いや、あの子たちには、あれぐらいいいわないとわからないのだ、と思ってみたり、母もゆれていました。

夏から秋にかけては、虫たちが主役の季節です。多摩動物公園昆虫館の高家先生に、身近な昆虫のお話を書いていただきました。虫の世界は、まだまだ不思議なことがたくさんあるようです。

我家の息子は、近くの墓地で蟻の巣をみつめました。小さな蟻でもけっこう力持ちで、大きなお菓子を上手に運んで巣の中へ持って行きます。自分の体の数倍もあるようなものを、一生懸命運びます。この蟻の仕事をじっと見ながら、息子は何を学ぶのでしょうか。

(K)

## 幼児の教育 第八十八巻 第九号

九月号

定価 四一〇円（本体三九八円）

平成元年 八月二十五日 印刷

平成元年 九月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

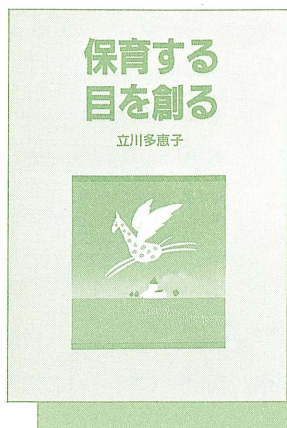
TEL・二九二二七七八一

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

# 保育する目を創る

立川多恵子・著



子どもがわかる 保育がわかる  
援助のあり方を示してくれる。

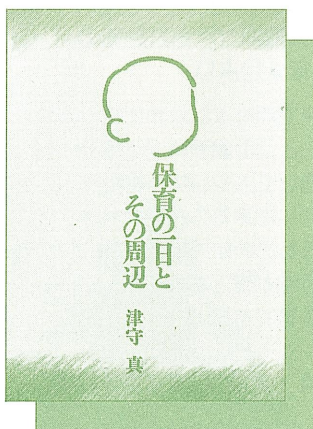
一人ひとりの子どもの姿や、行事のもち  
方を読みとり、担任と話し合っ、子ど  
もとの接し方や活動の方向づけを教え  
てくれる本です。

A5判・272頁

定価1,700円(本体1,650円)

# 保育の一日とその周辺

津守 真・著



保育実践の基本となる「一日」  
を中心に保育論を展開する。

- 保育の原点をわかりやすく述べる。
- 豊富な実践と深い省察で、保育者へ新しい保育の指針を明示。
- 幼稚園教育の在り方についても言及。

A5判・248頁

定価1,600円(本体1,553円)

# 幼稚園教育要領解説



教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

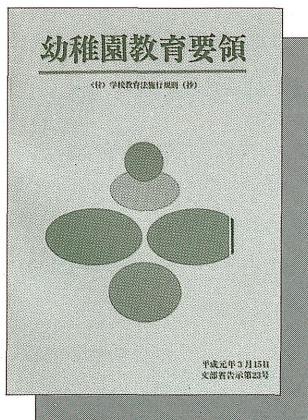
目次から
第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
第2章 どんなふうになるのか —考え方の基本—
第3章 幼稚園教育の内容
第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
付録 「幼稚園教育要領」全文

岩崎婉子・大場牧夫・黒川健一 編著  
小林美実・近藤充夫・高杉自子・森上史郎

A5判・270頁・定価1,200円（本体1,165円）

〈付〉学校教育法施行規則（抄）

# 幼稚園教育要領



文部省告示「幼稚園教育要領」改訂版で、幼稚園教育の基本的な精神が示されたもの。  
実施日は平成2年4月より

幼稚園から高校まで同時改訂公表され、教育のはじめは幼稚園からと幼稚園教育が位置づけられた。改訂版は遊びを通して人や自然と関わる力を培い子どもの発達に即した教育の必要が示された。人間として生きるための幼児期の教育内容が明らかになり、教育哲学が確立されたこと。保育関係者必携の書である。

A5判・16頁・定価100円（本体97円）